
須上ユイナの地球救済

大塩杭夢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

須上ユイナの地球救済

【Zコード】

Z8909M

【作者名】

大塩杭夢

【あらすじ】

普通の女子高生であるはずの須上ユイナは、超能力やヒーローなどの、非凡、非現実的な現象に憧れを抱いていた。

そんな時に地球の危機ですよ。なんかキーパーソンになつてます。「地球の平和のためになんか頑張る！」

実は自分の欲求を満たすためだなんて言えない……。

やや中二風SF超常現象青春電波コメディー。

人物紹介（前書き）

当然読み飛ばし可。

人物紹介

須上結菜。主人公。夢見人間。好奇心や探究心が強い、普通のティーンエイジャー。

桜木春風。格好つけたがる冷めた若者。常識的なことを言つておけば格好付くという思い込みもある。

瀬尾夏鈴。カリスマ。クラスの人気者。完璧な才女。

星野剣。男っぽい女。何か秘密があるのかも……ないのかも……。

須上瑞樹。星野と似た性格。……だけが固い。考え方が。

坂本竜馬。偽名。アルスですよ本名。

光村零。名前カツコイイ。

星熊透生。名前カツコイイ。

人物紹介（後書き）

インハイ狙つて大暴投つて感じですがよろしくお願ひします。

「私」紹介

馴染めない訳ではないんだけどさ。イケてる同級生の輪には入れなかつた。というか入らなかつた。入つてたまるか。

恋とか何とか言つている奴も、進路がどうとか言つてくる大人も、何というか全部が鬱陶しい。そんな感じの今日この頃。

進路がどうとか考える前にさ、考えることがあるでしょうよ。人は死ぬんだよ。それに目を背けて将来の話なんてしたつて、意味なんて無いに決まってるじゃんか。

私は皆と違つ。

誰よりも考えるからクラスではちょっと浮いてるけど。だけど嫌われてないのは多分私が聰明だからだし、何と言つか……。

そういう風に心の中でぼやいてないと、怖くて潰されそうなんだよ。

「あーあ」

この深い溜息は若さの現れだつて信じてる私がいるのである。つむ。

これでも色々と悩んでんだよ。

人生がこんなにつまらないなら、いつそ死んだ方がマシだと思つた。辛いことなんて何もないけれど、心から笑えるようなこともほんどない。

でも死のうかなーなんてことを少しでも思った瞬間、あの日のあれとかその日のそれとか思い出して、急に人生が楽しいものになつ

たような気がして。

仕方がないから一日待つてみたら、やつぱりつまらなくてやつてられなくて。

それじゃあやつぱり死のうと決心したと思つても、やつぱり未練が溢れて来て。

考えたらそもそも死ぬにふさわしい理由が一切ないから、遺書も全然書けない。

退屈だつたからなんて書いたら、死んだ後に呆れられて恥ずかしい。

生きる方が、楽といえば楽なんだ、これが。もういい生きる。

なんてバカらしい葛藤を繰り返し、私は今日も退屈な人生を歩むのであつた。

須上ユイナという一人の女子高校生、イコール私の日常である。要するに暇つてことですよ。

成績は中の上くらいで、部活はやってない。

……あと、テレビゲーム好き。……と、それくらいしかないかな。私の特徴とか人生とか語ろうと思つても、これ以上何も言えないんだ。振り返ると無意味な人生。きっとこれからも。

虚しい。価値も意味も何もない。生命活動をただ続けるだけの人生みたいな私。

きっと、意味が欲しいんだと思う。漫画やアニメの主人公がなんであんなに輝いているかつて、スケールの大きな存在価値を持つているからじゃん。

私は何の変哲もない恋愛漫画にハマれない。普遍性なんて無価値を自ら語るようなモノでしょ？

だからさ、探してみた。

やりたいこととか、叶えたい夢。何なら小さな目標でも、これ！

つて言えるものをや。

でも、大体何をやつたって、結局はテレビゲームの方が面白いって結論に辿り着く。

現実なんて所詮、そんなものだ。本当につまらない。

二次元のなんと輝いていることか。魔王とかドラゴンとか超能力とか悪の組織とか！

そういう未知なるものには、ロマンがある。

きっと、この退屈な世界も変わるし、そうなれば私にも、存在価値とか、そういうものが見出せるようになるんだ。

間違えて今生で叶う望みではない。でも私はやっぱり、そういう憧れを捨てきれない。バカって言われるかもしれないけどさ。

平穏とモードでない事件・上

波乱は突然に。

夢の始まりは、本当に急だった。

一〇一一年六月。

七色町 須上家。

深夜一時。

降り続く雨の音にうるさいしながら、私はとうとうパソコンでチャットをしていた訳です。

近頃の雨の降り方はおかしい。休校にはならなかつたが、三田も連続で警報が出るなんてのはちょっとひどい。温暖化の影響なのかなーとか思つと、世界の終わりつてのも、結構近いような気がする。

『コイナ：そこで私はにらんだわけです。七色には超能力者がいるんじやないかつて』

実際に顔を合わしていなくても、ネットワークで離れた相手とロミコニケーションがとれる。

神秘なんてどこにもない時代。悲しい時代に生まれひやつたもんだなホント。

『セオ：超能力というか、それはプラズマです。……あの、眠いんでそろそろ……』

『ハンゾー：それにしてもすんごい雨ですね……。そつちもですか？』

『コイナ：ですね。そんなに服部さん家と距離ないですけど』

『セオ：こっちも降つてます。雷とか落ちるかもね……』

瞬間。ピカ。

そして直後、私の部屋含み全世界が光に包まれいや全は嘘で頑張つても町内が限度だと思いますが轟く雷の暴力的な音がどばああああん、と響いた。

「うわあ……すごい」

瀬尾さんは預言者ですか。落雷ですよテカイの一発。音の大きさから考えると、結構近所に落ちたのではなかろうか。子供なら、ワーキャー言ってテンション高くなるんだろうなー。でも私はこれくらいではしゃぐほど子供でもないんですよ。もう高校一年生ですよ。

けどね、残念ながら雷は単なるパフォーマンスではなく、ちゃんと実害もあるのですよ。

「……止まつた」

私のパソコンの画面が止まりました。見事にピタリと止まつたポーズ状態。

ずっとチャットの画面を映しつぱなしで変化無し！ やだもうパソコン死んだかも。

「あーあ」

溜息だけ、一人ぼっちの部屋に響く。

電灯はつけてない。明りは今や止まりつぱのパソコン画面だけなのです。

だから部屋暗い。

外は雨。

暗い。

目の前だけ眩しい。

目痛い。

画面に羽アリ多い。

畳が臭い。

雨と夜とパソコンのバーカ。

「……落ち着け私」

自暴自棄になってしまった。深夜一時つて結構センチな時間でもあるしさ、人恋しい感じつて言つた方が合つてるかも。意味は全く違つけど。

とりあえずパソコンは大丈夫でしょう。パソコンセント抜けば普通に改めて起動できるだらうじ。多分だけどね。

チャットとかもどうでもよくなつてきたし、寝ようかな。
いやでも、この雨には何となく惹かれるものだつてある。「日常」とはちよつと違つて、何となくロマンチックだ。……そういう感じで、寝るのももつたいたく思えてきた。

日本の雨がこれならスコールつてやつはどんなに激しいのだらう。
南国とかいいなあ。マンゴーとかいいなあ。ドリアンは……臭いよなあ。

と、いつも通りの妄想にふけつて、そのつが結局眠気が迫つてきやがつた。

「寝よう」

席を立とつとした瞬間。

急に、部屋が真つ暗になつた。部屋を照らす唯一の光が失われたのですよ。

ブツン。とね。

パソコンの画面が消えました。黒いよ。……なんだか、急すぎて逆に違和感がある。機械が反応を起こすには何かしら原因が必要だと思うんだけど。まあ、そこまで科学に強くない私には、その原因がなんのかなんて知るよしもないんだけどさ。

……ちよつと眞になつて、画面をのぞく。

「お」

気のせいかな。

ポツン。と。

真っ黒い画面の中に、白い光の輪が一つ。瞬き、広がった。例えるなら、ちょうど水溜まりに雨粒が落ちたよつな……そんな感じ。心靈というにはスリルが足りない。けど、暇を持て余した私の心を刺激するには、充分すぎる訳で。

また、ポツン。ポツポツと。

「……なにこれ、嘘、夢？」

誰に言つわけでもなく呟く。頭を叩くと痛いから、起きても。夢じゃない。

ポツン、ポツン。ポツポツポツポポポポポ。

「え、え、嘘、ちょ」

どしゃぶりの雨とともに激しくなる瞬き。私の持つている常識ではありえない光景を、私はただ茫然として見てゐるしかなかつた。

数分が経過した。部屋が暗くて時計は見えない。

この部屋にある唯一の光といえば、パソコンの画面に映る光の輪だけなのだから。

ポツポツポツ。瞬く輪。夢か現実か。……本当に分からなくなりそうだ。

「……なに、これ」

喋りながら、私は自分の声がふるえていることに気が付いた。恐怖なのか感動なのか分からぬけど、とりあえず興奮している。ドクンドクンと脈打ちも早くなつて、感情がミキサーにかけられたように落ち着かない。何といふかべつとりしている。

輪は時間とともにやや収まりつつある。終わりかな？ と思いま

や、うつすらと……

少年が映つた。

情けなくも腰を抜かす私。だつて人が映つたんだよ？ その少年は突然、突拍子もないようなことを言い出した。

「……マジで映つてんのか、これ。……はは、ははははは」

変質者かよ。

「はははは、はあ、はあ……。よし、これから僕は隕石を落とす。この隕石は一年後、地球……それも日本に衝突するだろ？。食い止めたいなら僕が送つた招待状を見てみな。世界を救う方法が分かるからや。」

そしてスッと消えていった。

「……な、何じゃそりや」

隕石？ いや、そりやあ実際にそんなことが出来たら凄いけどさ。でも、ねえ。何だろ。何なんだろ？。ひょっとしたら夢の中なのかな、これ……。なんてことを思つていたら案の定、起きたら朝だった。夢かな。やつぱり。

続く！

平穏とセーでもない事件・中

ででーん。前回までのあらすじ！

雷が落ちて気付いたらパソコンになんか映つてたのであった。

そして朝っぱらからとんでもなくはないナゾ若干心当たりのあるニユースが流れてきた。

隕石発見。このままだと地球に激突の可能性も？ だつてさ。まさか昨夜に起きたことつて……。なんて思つてしまつたが最後。なーんか妄想が頭の中を支配する。昨日のあれは夢なんだと完全には割り切れていない私。

とりあえず気になつてパソコンの電源をつけて、とりあえず困つてみた。

「うつわー……」

見慣れぬアイコンが一つ。ファイル名が「神ゲー（招待状）」の時点ではスクロールをかち割りたくなつた。やり方が不細工過ぎるし訳が分かんねええええええ。

いや、気にしたら負けだよね。とりあえずダブルクリック。そしてフリーズ。昨夜と同じ。まさか。

冷静に考えて見る。昨日の出来事が嘘だなんて判断には行きつかない。

だつて、それっぽく辻褄が合つてるんですよ？ しかも何かもう落ち着かないよ何これ。恋慕にも似たこの感情を誰か何とかしてくれ。

で、もつとよく考えましたよ私。とりあえず根拠らしい根拠は無いんだけど、隕石のこれから進行ルートとあの少年には何らかの関わりがあるはず。

けど、そんなことを人に言つたら間違いなく私は異常者扱いされる。

他の人にとつては今日も昨日も明日も平和ないつもの毎日な訳だから、いくら私が隕石とか言つても私が社会から疎外されるだけのは明白なのです。

本当は人に言いたくて仕方ないんだけどさ。しばらくは様子見といつことにしよう。

正直なところ、私はとんでもなくワクワクしていた。何がが変わる。非凡なことが、きっとこれから起つ。

胸を躍らせながら玄関を飛び出した。徒步で数十分。七色高校に到着。

ひつじょおおおおおおおおー。

期待外れだつた。

こじままでの道で普段と変わつたことは何もない。

日常はそう簡単には変わりません。

明日世界が崩壊するとしても、世間はこのまま何も変わらないのかも……。

そう思つと、鳥肌が立つた。

私の通う七色高校は、廃校になつた小学校の校舎をリサイクルして作られたエコ高校だ。

陰気な雰囲気、そして七色という校名の影響もあつてか、七不思議とかも結構ある。

非日常の扉が……とか思つたけど、結局一度も幽靈なんて見れなかつた。

さて教室に着いて一息。こじままで来ても、隕石のことが気になつて仕方が無い。

私は口が軽い。本当に絶対にばらしてはいけない秘密は守れるんだけど、昨夜のことや隕石の話は、私の中ではそこまでロックがかっていなかつたようです。

奇妙な話は奇妙な人へ。

学校に着いた後、すぐに上級生の教室に飛び込み、三年生の星野剣（つるぎと読む。もはや女子高生の名前ではないとも言いたいが剣さんは女子高生である）という先輩を屋上に呼んで話をした。

自称、正義のヒロインで、書類とかの偽造という訳の分からん趣味を持つこの人は、女子なのに女子にモテるという不思議な魅力の持ち主だ。

まあ、男にも十分モテるんだけどさ。とりあえず、うん。モテモテですよ。私とは中学からの馴染みである。

昨夜のことと隕石のことを一通り聞いた先輩の感想はこうだ。

「……そりゃあお前、隕石のコースを偶然いち早くゲットした物好き二ートがだな、善良な一般人をからかってやるつとウイルスを撒き散らしただけじゃねえかな」

そうきたか。この人、根は常識人なのである。

「……あー、でも、ありえなくはない……ですね」

いきなり画面に人が映るようなウイルスなんて見たことはないけど、納得する私。

「……でもほら、フリーズしたんですよ？ 止まった後に人が映つたんですよ？」

「それも、壊れたように見せる演出だろ。ウイルスとかの」「雷は？」

「偶然タイミングが良かつたということで。……俺もパソコンは詳しくねえから、そんなことが可能なのか分かんねえけどさ。すごいんだろう？ 今時の技術は」

…………。私もパソコンについて、そこまで詳しいことは分から

ないから、先輩の言つていることが正しいのかは分からぬ。

分からぬけれど、納得してしまった。けど、えーと、あああああ！

こんな私は社会不適合者でしょうか。どうとなく孤独なよつな何かそんな感じ。

続
<
!

平穏とセーでもない事件・下

悔しいんで、教室に帰つてから同級生の桜木春風に同じことを話してみた。春風は私の相方とも呼べる存在で、ちよつとつり田の女子だ。髪が長く、ポニーテールで空を飛んでも不思議ではない。

笑われた。

「わんぱく坊主かアンタは」

私は何かもう涙流しそうだった。

「隕石の進行ルートは君たち次第。……そんなもん、うちだつたら頼まれても信用できん」

「つ……現実的」

何なんじやあああちくしょおおおおー…と思いつきり叫びたい。

みんな、昔は大きな夢を持つていたのにな。高校にもなると進路とか学歴とかうるさいのなんのつて。あの日の夕焼けの色を思い出そうよ。涙を流しながら見たあの夕陽をみんな忘れたのかよー…

「実際にあの場に居合わせてたら、絶対に信じるつて！ きやー画面に変なん出たつて感じになるつて。春風だつてわんぱく坊主状態になるつて！」

「……まあ、確かに客観的な立場やから何とも言えんけど。じゃあアンタは今、冷静な状態で考えて、どうなん？」

「どうなんつて……。今も冷静じゃないからなあ」

「アホか」

……くこむわあ。ストレートすぎるもん。まあ、それが春風の良いところもあるけど。……真つすぐすぎて毒舌の域に入るのも考えものだ。

そしてそんな真つすぐ少女にケチヨンケチヨンにされた私。

高校生にもなつて、漫画やアニメのようなハチャメチャな世界に憧れるのは私だけなのだろうか。

趣味とかじゃなく、本気でこの世が変わることを願つてゐる。そんなアホな私の周りで隕石がどうのこうのとかパソコンの不思議な現象とかが起つた。ワクワクしない訳がない。

確かに私、わんぱく坊主並かもしれないけども。でも全部事実なんだよ。

どうして誰も信じてくれないんだよ……。

「何というか、隕石の存在は本当じゃん。コースであつたじゃん。激突の可能性つて」

「他の番組では全く心配ないとが言いよつたで。あの番組、結構大げさやん。スキヤンダルとかも」

「……つまり、私が一人で盛り上がりつてただけつてこと?」

「せやろうな」

エセ関西弁の攻撃! 効果は抜群だ!

「つづ、だ、断言……」

昔、夏祭りのくじ屋で欲しいものが当たらなかつた時を思い出す。並べられたゲーム機は子供を釣る餌だと氣付いたのは、それからずつと後のことだった。

まさか、またあの気持ちを味わうとは夢にも思つてなかつたけども。

切ない。

「ちなみに、うち以外の誰かにその話したんか?」

「星野先輩にはしたけど。……他に言える人いないからなあ。友達少ないのさ私!」

中の下……いや、下の上辺りか。何故そういう位置にいるのか、自分でもよく分からぬ。成績も良いし、決して落ちこぼれではないはず。

……なのに、致命的な欠陥。友達が少ない。

リアルワールドは楽しくないです。だから隕石にこんなに興奮

してんのかな。

さて、星野先輩と春風、一人の言つとおり、特に世界に異変はなく、今日も平和でした。

一人に夢をぼっこぼこに壊されて、泣きながら夏祭りを後にする子供のような気持ちで教室を出て、一十分。現在私は小さな川沿いの田舎道を歩いている。

車一台が通れるかどうかくらいの細い道。

ここには基本的に人がおりず、割と大きめに鼻歌とか歌つても平気なので、私はこの道をウルトラお気に入り通学路と呼んだり呼ばなかつたり。いや、呼ばないよ。

ただ問題は、それでもたまにいる通行人とすれ違つたりした時、鼻歌聞かれてたかなーとか心配になること。まあ、それを差し引いたつて、十分お釣りがくる。

もうなんか、この道を通る時が一番落ち着く。

いつもの風景。いつもの音。

サラサラと聞こえる川のせせらぎ。

名前も知らない虫の声。

雨は止んだけど、空を覆う雲の間からほ燃煤えるものが、ドドドドドと轟音を響かせて降つてくる。

……そりゃなく超やばい。

だつて、ドドドド。なんか、ドドドド。上を見てみると、もつとやばい。

「うわ……

思わず声が出た。苦笑に近い。

だつて何か降つてくるんだよ。燃えているものが。
それもだいたい真上くらいから。

もしかしてUFO? とかいう期待より先に、このままじゃ川に落ちるけど大丈夫かななんて気楽な心配が頭をよぎった。

あ、じゃあ火が消えてちょうど良いのかも。

なんて考えていると、十秒もしないうちに飛来物は落ちた。川に。とりあえず川の水で消火されて良かつたんだけど、よく見ると人間だから困る。だつて人間。

服装は黒い現代風の服装で、焦げているのかそうでもないのかこれが死体だつたら驚くが、生きていたらもつと驚く。

だつて生身だもん。

焼けてない時点でとんでもない。生きていたらホントに驚きの一乗だ。

そして彼は生きていた。覚悟はできただから一乗つてほどでもなかつたけど、腰を抜かすかと思った。

彼はひとまず普通に起きて、道まで登つてきて私に軽く会釈した。

……戸惑つてるぜえええええ私。落ちつけ私。

落ちついて、落ちてきた人を冷静に見る。綺麗で中性的な顔立ち。男装美人かと思つたけど、多分男だ。

飛来してきた勇者は私に言った。

「須上結菜さんですね」

「え、あ、はい」

声で男だといふことがはつきりした。なぜ私の名前を知つているのかは置いといて、いや置いておけないよちょっと、

「結論から言うと。おそらくあなたは地球の運命を担つています」

「え、あ」

……え?

オソラクアナタハチキュウノウンメイヲーナツティマス。

まあ、隕石とかパソコンとか隕石とか隕石とか。確かに心当たりがないわけではないが、まあ、危ない気もするわけだ。

さあこのセリフに対し私は何をすればいいんだろう。

「……えっと、あなたは……誰？……ですか？」

ぱつと見た感じは、私と同い年くらいの少年なのだけれども。

「ああ、申し遅れました。僕の名前はアルス。平たく言うと、宇宙人つてやつです」

同じ年とか言う前に、地球人じゃなかつたよ。

アルスくんは自分のことについて簡潔に説明してくれた。

「世の中のどんな星も、いつかは無くなります。星にも寿命がありますから。

しかし、事故や事件など、何らかの理由で寿命より先に死んでしまう星が存在します。

事故の場合は仕方がないと言えますが、事件。それも外部の世界からの人物が関わる場合、見て見ぬふりもできません。

異世界間の警察を自負している僕らは、そついた事件の臭いを嗅ぎつけると、僕のような派遣社員を送り込むわけです

まとめるといふだ。

「どこか危ないとこある？ あつこの世界の地球つてところ危ないんじやね？ 行つた方が良くない？ 了解。派遣向かわせます。

「ということでしょうか

「平たく言えば、そうですね」

ふざけていいる風じやない。

……なんてこつた！ これこそ、私がずっと求めていた展開じや

ないか！

喜びと衝撃と困惑が入り混じる。

未知との遭遇に、私はなんでか涙しそうになっていた。

リアルワールド崩壊！

ライトノベルの主人公みたいに未知を拒んだりはしないのさ！
ようやく変化が訪れるんだ……！

続く！

チャンスとか、好機とか。

そんな言葉を聞く度に、根拠は無いけど嘘っぽいと思つた。

でも、やっぱあるんだよね、そういうの。

良くも悪くも、変わらチャンスは私の田の前に降つてきた訳で。

宝くじ一等賞より遙かにやばいよ。嬉しそうで興奮し過ぎて氣絶してもおかしくないかも。

とりあえず私は、空から降つてきたこの異世界人アルスくんを家に連れて帰ることにした。

勢いで即決。喜びは一種の麻薬です。正しい判断とか出来なくなるからね。

竹から出てきた女の子でも、川の上流から流れてくる桃でも持つて帰るのが日本人ですよ。異世界人だって……ねえ。持つて帰りますとも。

たつた今までこの星に存在しなかつた彼には、当然だけど住居がなくてお金もない。だからってホームレスになつてもらうのも気の毒だし。居候くらいはさせてあげたいじゃないですか。

……なんて慈悲心も無い訳ではないけど、本音を言つとひ。彼といじで別れたら、このチャンスを逃してしまいそうで怖いんだよ。居候させるかどうかは親の管轄だから、家に入れられるかはまだ分からぬけどさ……。

「しかし、さつきからどうも違和感あると思つてたけどさ。……何で私たち、会話が出来てるの?」

「そりゃあ、僕が日本語を使つてるからですけど……」「当然のように言つ彼。

「なんで喋れるのよ」「

「誤解されがちだけど、僕はここに不時着した訳じゃなくて、この星を救うためにここに文化を多少は勉強して来ているんだ。日本は侍や相撲取り、そしてガングロの国だってことも」

「いや違うつて」

侍もガングロも既に衰退した文化ですよ。何だか急に不安になつてきた。

「……うちに居候する時、あんま変なこと言わないでね」

「頑張ります」

「あと敬語も禁止。使われるのは嫌いなんだ」

「あ……うん、分かった」

そういえば、彼を居候させる理由もちゃんと考へないといけない。

記憶喪失のホームレス高校生でいいか。

家に着いて、母さんに事情を話す。

「記憶喪失のホームレス高校生？ うわ、大変。うちでよければ是非

それでいいのか母さん。簡単すぎないか母さん。もう少しは考えろよ母さん。

我が家セキュリティの甘さには呆れるばかりだが、今回に限つては感謝しなければ。

何たつて地球の運命が左右されるからね。

「ところでお名前は？」

「」

アルスなんて言えない。違和感あるし、目立つ。

偽名……偽名……。平凡すぎると自分たちで記憶できないし、目立ちすぎるのも考えものだし……。

肝心な時に頭が回らない。こんな時に頭の中には坂本竜馬しか出てこなかつたりする訳で。

「……坂本竜馬。だよね、竜馬くん」

「え、あ、僕は……あ……」

じーっとアルスくんを見つめる。アイコンタクトで彼も理解してくれたらしく、黙ってくれた。びくびくしていりゆつに見えたのはきつと氣のせいだ。

「そう、分かつたわ。よろしくね、坂本くん。自分の家だと思つて、好きに使ってちょうだい」

そうして居候の許可は下りた。結構手の届かない望みを持つていた私だけど、意外にも居候が一人来ただけで退屈といつものは消えてしまうものらしい。

清々しいよ。なんか。

「とひるでじうじて名前だけは憶えていたのかしら……」

「え、あ、えーと」

言葉に詰まるアルスくん。……近々、絶対にボロが出るよ……。

「一階がリビングと洗面所と……あと、母さんと父さんの部屋があるかな。二階に、私と兄貴の部屋。アルスくんは廊下に寝袋で寝る……と。そういう感じだね」

簡単に家の説明をしながら、家の中を案内してみる。

アルスくんには、こういう家の内装や雰囲気がなかなか新鮮だったらしい。目を輝かせながら、興奮気味に相槌をうつっていた。

「すういなあ……コイナさん、これが地球の文化ですか」

「いやまあ……場所にも寄るけど。日本の二階建ではこんな感じね。あと敬語もさん付けもやめれ」

「あ、ごめん」

台所に興奮する彼のセンスが、私には全然分からない。しつかし流暢な日本語だよね。

「もう救いに来たというよりホームステイみたいになつてるけど、やつぱり知らない場所の文化つて面白いものだよ」

「……何しに来たのよ、君」

よく宇宙人に代表されるような火星のタコも、地球上に来たらこんな風になるのだろうか。……それはそれで面白いけどさ。

「どうよ、この家。……まあ、満足行くかは分かんないけどさ」

「いえ、十分ですよ。外で寝るのを覚悟してたんで、屋根があるだけでも本当にありがたいです」

「はは。大げさだよ。ていうか敬語。同級生とかに敬語使われるのつてさ……」

待てよ、何歳だ彼。

別世界の住人だから歳という概念があるかどうかすら分からないし、一年が三六五日ではないかもしれないし、成長の仕方とかが違えば当然歳というものは意味のない数字になつてしまふんだけど、とりあえず聞いてみた。

「歳？ この国の数え方でいくと、十七かな」

ホントにタメだった。

「……なーんか君、本当に宇宙人なの？ ほとんど人間と同じじゃん」

「あれ、言つてなかつたっけ？ 僕は異世界から來たつてだけで、生物学的な区分でいえば君達と同じ人間だよ？」

……マジでか。

地球人は宇宙人の一種という考え方贊同したことのなかつた私だが、流石に考え変わるわ。

でも、全く別の場所で同じ種類の生物が発生するなんて有り得る

のかな……。

さて。外はもうすぐ夜になる頃。空は、隕石とかそんな不安を一切感じさせないような、キレイな紫色をしていた。

「そういえば、コイナさん……じゃなくてユイナ。君つて簡単に僕の存在を認めたけど、あれは地球の危機つていうものに関して、何か心当たりでもあったからなのかな。異世界の存在を知らない人にとっては、僕のような存在は衝撃的なことじやないか？」

アルスくんが言つ。そういうや彼は遊びに来たわけじやなかつたんだった。

「……うん。一応、心当たりというか何というか

私はパソコンを指さした。

「最近ね、私の周りが異常なんだ。……だから、君の登場もその異常の一つ。大袈裟には驚かないよ」

夜十時。雨もすっかり止んだのはいいけど、それはそれで静かな夜の到来な訳で寂しささえ感じられる。

さて、朝と同じように、パソコンの画面に出てきた「神ゲー（招待状）」というファイルをクリックすると、画面そのものが凍つたように動かなくなつた。

一分経過……。一分。三分。……アルスくんが欠伸した。分かるよ。私も同じ気持ちさ！ この五分の長さは耐え難い。

「……コイナ、これって誤作動じゃあ……」

我慢できなかつたのか、アルスくんが呟く。

「いや。昨夜も今朝も同じだつたんだ。しばらく待つてると、画面が急に暗くなつてくるの。きっと……」

予想通りだ。画面が暗くなり、次第に円が瞬き始める。しばらくそのまま待つていると、少年が映つた。

「うん、同じだ。ちょっと、始まり方が違うけど」

前の時は雷でパソコンが停止してから始まつたけど、今回はプログラムによって私が半分意図的に開始した。つまり、受動と能動、テレビとビデオの違いがある。ま、それだけなんだけどさ。

画面の中の少年は、昨夜よりも饒舌に語り始めた。

「このプログラムを開いたということは、君もこのゲームに無条件で参加することになる。

世界の運命を変えるかもしれない、神のゲームに。ちなみに無料ね。俺の場合、稼いでも意味無いし」

意味無いんだ……。

アルスくんは画面を睨み続けている。険しい目がちょっとびりセクシー。一人じゃないせいか、私も昨夜よりリラックスしているみたい

いだ。

「……彼が、地球の生死に関わると？」

「確信はないんだけどね。……隕石を落とす、だつてさ」

「隕石、か……」

胡散臭いよね。

星野さんや春風の言つていたように、单なる隕石ニュースネタのいたずらだって考え方でできるし、ビームまで信じればいいのか分からぬといえどそつだ。

でも、そだとすると、アルスくんが私の前に現れた理由がなくなる。

この少年が実際に隕石に関わっている証拠は確かにないけど、そうじやないと、私の周りに起こつている出来事のつじつまが合つてこない。

まあ、この「神ゲー」とは全く無関係なところで、私が地球の生死と関わるんなら納得だけどさ。

つまり、アルスくんの登場が彼の行動を裏付けした。絶対にとはまだ言えないけど、隕石は多分落ちる。画面の中の彼が言つことば、きつとデタラメじゃない。

……そいえば、画面の少年がさつき、「君たち」つて言わなかつたか？ 複数ですか？

「僕の名前はヤシャ。これ偽名。勘違いされそうだけど、地球人だ。僕はひょんなことから、未来の力を手に入れてしまった。詳しくは語らないが、この力を使えば僕はこの世界の神になれる。

それでさ、運が悪いことに……俺は人間が嫌いなんだよね。だから来年の今日、僕の仕掛けた隕石が、地球に衝突する。

怖いかな？ だつたら阻止すればいい。これから始めるゲームですね。

腕つ節だけじゃない。人間としての知能、協調性……。社会の逆

風や誘惑に打ち勝つ、本当の強さを持つものがいるなら止めて見せろよ。言つておくがこれは余興だよ。まさか隕石一発で終わりなんていう呆氣ない終わり方はしないよな」

「まあ、頭のネジでも外れたようにしか聞こえないけどね。

「どうよ、アルスくん。この人、隕石とホントに関わりあるかな」

「……そうだね。とりあえず、彼は元々この世界に生まれた人間みたいだね。地球最強なんていう、余所者から見れば規模が小さいことを誇つている」

異世界など視野に入れない。確かに、アルスくんよりもよほど規模が小さい。

「まあ、自称しちゃってるけどね。……でも……」

外部の世界から現れた人物が、星の生死に関わる場合に、自分のような派遣社員が使わされる。

画面に映った少年ヤシヤが元々地球に生まれた存在なら、アルスくんがここにいる理由つてないよね。あれ、裏付けとか全然出来てなくね？ 色々と繋がらなくなってきた。

「でも、未来の科学力とか超能力とか言つている時点で、かなり異世界とも絡んできてるんじゃない？ んなもんこの世界にはないし」

「……どうかな。断言はできない」

アルスくんが言った。

「なんですよ」

「一個ずつ言つけど、まず、超能力というのはどこの世界にもあるもので、この世界だつて例外じゃないんだ。生物、特に、知能の発達したもの……まあ、代表的なでいうと人間が先天的に持つて生まれる飛びぬけた才能で、食文化とか親の遺伝とか、そういうた産まれる環境に左右されない。つまり、そこがどんな世界であろうと

も、とりあえず生物なら能力を得るチャンスがある。例外として、石が超能力を持っている場合なんかもあるけどね。だから、他の世界との関連があるかどうか、超能力だけでは判断できないんだ」

アルスくん本領発揮である。輝いてるぜ君。
逆に私の理解力はダメダメだ。

「……えーと、まとめるど、そこいら辺ですれ違つたオッサンが超能力を使える可能性もあると? 存在しないんじゃなくて、確認されていないだけだと」

「そうだね」

あつさりと認めたアルスくん。マジでか。今度もし電車に乗つたら、隣の人をよく見よう。

「どうか、アルスくんはそんなことを普通にペラペラ喋つちやつてもいいんだろうか。

「で、未来の科学力つて言つのは……」されは、まだどこの世界にも存在しないんだ

「え、でもなんかこいつ、この世界より発達した文明を持つた世界だつてあるんじゃないの?」

「そりやあ、あるけど。でも時空を超える方法つていうのは、まだどこのどんな世界にも無いんだ。ここより進んだ世界の科学という意味なら、未来の科学なんて言い方は正しくない」

「タイムマシンは未だ出来ずか」

「一方的に未来へ行くモノなら、もうすくべどこの世界で完成しそうなんだけどね」

文化や物質を過去に持ち帰る術はない、といつことか。
……えーと、うーんと……まあ、要するに、

「総合して言つと、このヤシャつて人は、地球滅亡とか君がここにいることとは無関係かもしれないってこと?」

「まだ分からぬけどね」

なるほど。……と、ここまで来て、ゲームの説明を聞き流しまくつていてることに気がついた。

「……以上で、説明は終了。一年後、世界がどうなっているのか、楽しみにしてくよ。……じゃあ、またいつか」

すいませーん最初と最後以外、全部聞き逃したんですけど。まあでも、録画だから、また聞け……なかつた。やり方が分からぬ。

普段使っているような便利ソフトならともかく、「神ゲー」のプログラムには説明もついていないし、対応のしようがない。不便。ふざけんなヤシャとかいうアホ。

「ただいまー」

兄貴が帰ってきた。

さて。アルスくんのことをビビリやつて説明しようか。

「兄貴だったら多分、普通におかえりーとか言つたら気付かれずに済むと思うよ」

説明はいらない。兄貴なら分かつてくれるー

「そ、それはさすがにないと思うけど

「私を信じろー」

階段を上る音。さて、どうなるだろ。

「おかえり、兄貴」

「おう」

「お兄さん、お帰り」

「オマエ誰ええ！？」

分かってくれませんでした。

母さんたちとは違つて、兄貴だけはアルスくんの居候に反対した。ま、なんとか説得したけど。

んで、目覚めの悪い朝である。

警報でも出でいねは、今朝はパソコンやり放題だつたんですね。
中途半端に強い雨つて一番困る。

「あいにょ 晴田は良いことがあつてこきはんなし 異世界人との出会いっちゃつた訳だからね。奇声も飛び出しますよ。だから雨くらい許す！」 という訳で仕方なく、私は今日もこの通学路をてくてくと歩いているわけです。

昨夜から始めた「神ゲー」は、言つてみるとスタンダードなローラープレイングゲームだった。

ターを倒すというありふれたもの。

ネットワークの特色として、他のアレイヤーとの協力や駆け引きなんかがあるのも意外とあり当たりでさ。とても現代に通用するような特徴とは言い難いのであります。

ツタリかもなーなんてね。

そう思われても仕方がないよ主催者さん。……………実際そうなのかなーとか思うと、何となく切ないけどね。

さて、喜ぶべきか嘆くべきか、今日も通り魔や何かに襲われずに、無事に七色高に着いた。何も変わらない通学路とか、何も変わらない教室にはうんざりする。

あんなゲームまで出回って、この普通でなんで？ もうと、
漫画やアニメみたいな展開になつたりはしないのかな……。

「……とか、そうなれよ。
……ならないよな……。

「よ、コイナ。昨日の隕石の話、結局どうなつたんや」

エセ関西弁で、いや私も本物知らんからなんとも言えないが多分
エセ関西弁で、春風が興味なさげに聞いてきた。もしかして、内心
は気になつてんじゃないのかこいつ。

「……えつと、あんまり言わない方がいいかもしねないんだけどさ
……」

と言いつつ全てを話す私。己の口の軽さに呆れるつてのも悲しい
もんだ。自業自得じやねーかなんて突つ込みはヤボですよ。弱者に
しか分からぬ心境だつてあるもんなのぞ。

一通り話しあがめた私。やや呆れた視線が痛いが。

「……ホント、くだらん『太話もええ加減にせんと、いづれ頭腐る
で』

どんだけ冷めてんだよーいつの頭。そして直球である。結構、
心にダメージ。

世間的に、まともで正しいのは春風の方であつて、私はバカルー
トを進み中だつてことがはつきりと示されるこの尖つた感覚は、私
には効果抜群だ！ うわーん。

アルスくんのこととネットの話も本当なのに、それを証明する手
段がない。まあ困つた。困つてぢやあ見る見るうちに弱者だ。

だつたら、現実的。そんな彼女の生き方の方が生きやすい。けど
さ、それって楽しいの？ 生きやすければそれで幸せなのかよ。違
うでしょ？ そんなんつまらないじゃん。

夢を見ていたい。ありえないことを信じたいんだよ。昨日、彼は
上空から、燃えながら現れたんだ。異星人や超能力者はいるんだよ。

なーんて言つたところで、私が頭おかしい人扱いされるだけなんだよね。

しばらく春風と言い合ひをして、もうそろそろ先生が来るなんて思つた瞬間、扉から先生が現れた。

ちよつとは未来予知に自信がついたが、まあこれが明後日にはほぼ完ぺきに忘れきるレベルの問題だと思つと無意味な収穫だ。

「よーし出席とるぞー。赤井」

「休みー」

「何だと。まあいいか。井野」

「はーい」

クラス全員の名前を呼び終わると、先生は唐突に、「転校生紹介するぞー」

などと言いだした。

「まーた中途半端な時に来るもんやなー」

春風はどーでもよせそつに呟いた。

「あー、確かにね」

なーんて言いながら、内心、私の場合は正直すごく心を弾ませている訳ですが。新たな出会いってやつ。ここから始まるドラマだつてある訳じやん。

先生が手招きすると、廊下から転校生と思しき人物が現れた。や、他に候補はいなけれどさ。

ぱつと見た感じは、おとなしそうな女の子って感じ。不機嫌そうな目つきとかは、いかにも誤解を呼びそうだ。春風や私に近い人間なのかもしれない。そんな転校生さんである。

ミステリアスキューティ威圧感。……いわゆるクーデレ? いやデレでねえけど。

「……転校生の、光村、です」

殺氣を含んだような声。タダ者ではなさそうだ。最近の私の周り

は一体どうなつてゐるんだろう。そのうち私、死ぬんじゃなかろうか。
「じゃあ、光村。……は、そうだな。あの空いた席に座れ。そろそろ席替えもしないといけんな」

マジカマジカマジカマジカマジカマジカマジカマジカ。
空いた席は私の隣だつたりする訳で。右には春風、左には転校生さんといつこのフォーメーションはなかなか厄介な気が。

……なんて思つて、本音を言えばワクワクしてこのんだがさ。

朝の授業が終わる。左に座つた転校生の光村さんとは、まだまともに話していない。

だつて、なんか話しかげば、雰囲気をかもし出してるんだもん。緊張しているのか嫌われているのか分からぬけど、なんかふとした瞬間睨まれたりするし。

人見知り、直さなきやいけないんだけどねえ。

「……ああ、もう弁当の時間か」

時間が経つのが早い。昼食はこう、クラスの皆が群れる時間帯ですよ。近所つてことで光村さんも誘おうかと思つたんだけど、いなかつた。

席を移動するつてことは、もつ友達ができたつてことだらうか。

……いやいや、ずっと私の隣にして、友達作るなんて不可能じゃね?

「……ま、いつか。春風、どうする?」

「おう、食おうや」

教室には、複数の生徒……特に女子で構成されたグループが幾つかある。

何故か、私と春風はそつと群れには属していなかつた。きっと

かけが無かつたといつものもあるけれど、馴染めないつてのもある。

例えばこんな風に、

「須上さん、今日、こっちで食べない？」

あえて私のみを誘つたり、

「あー、いや、今日は遠慮しとく」

「……そう」

断るとなんとなーく棘のあるような無によつた態度を一瞬だけ覗かせたり。そういうつたある種の縄張り意識みたいなもの。それが何か性に合つていなかといつうか……。と言いつつ真っ向から歯向かう私つて何なんだろうね。何だかもう一人ぼっちですよ。

週に一度は、一番大きなグループのリーダー格、瀬尾さんに声をかけられる。春風と一人の時に、わざわざ私だけに対してだ。

ルックスも良く成績優秀でついでに毒舌な面がある春風は、男子からはモテるが、女子から嫉妬や敵意を受けやすい傾向にあつた。けど、小学生のよつた露骨ないじめをするほど馬鹿ではない彼女らは、至つて自然にターゲットが孤立するよつ、日々計画を進めていくのであつた。完。

いや終わらんが。

「……行きたいんやつたら瀬尾らのとこに行つてもええねん。うちは別に一人でかまへんし」

なーんて言う春風。全く強がりもいといつことである。

瀬尾かりん。金持ちで、ついでに何かよく分からんけどカリスマ性みたいなものも持ち合わせる才女。私とは結構古い付き合いだけど、大体常に友達の友達的な関係だからあまり仲良くはない。……悪い訳でもないんだけどさ。

「私が本当に瀬尾さんとこ言つたら泣いて悲しむくせにさ」

「ア、アホ言うな」

若干顔を赤くして反論する春風は、ちよつと必死で可憐かつた。

「アホじゃないよ。孤独つてそういうもんでしょうが。……つーか、

そういう光村さんつて瀬尾さん達と一緒にしないね」

「ほんまやな。……席どころか、教室まで動いたんかな」
なんてアクティブ。……な性格には見えなかつたけど。トイレで
ご飯とか食べていたらどうしよう。隣の席の人間として、何となく
責任を感じてしまつ私であつた。

弱肉強食。瀬尾さんを見ていると、何となくそんな言葉が浮かん
だ。

ぱつとしない私らは、弱肉なんだろうか……。何考えてんだろ私。

昼休みが過ぎると、光村さんはいつの間にか私の隣に戻つていた。
授業。ホームルーム。終了。放課後突入。何事もないですよ、も
う。結構、人生つてすぐ終わるんだろうね。

なーんか春風も光村さんも一人でここに帰つてしまい、置いていかれた寂しい可哀相な私。瀬尾の奴もこうこう時には全然誘つてくれんですよ。

何となく腹が立つて、珍しく遠回りになる町の道を通りていると、兄貴と星野先輩に会つた。

「あれ、あ、先輩、ども。兄貴、何してんの？」

「別に。つか、横断歩道の真ん中で立ち止まるなって」「うお。兄貴の指摘で初めて気がつく私。どうも、すぐに周りが見えなくなる癖は直さないといけないな……。

「で、何で一人が？ デート？」

「そう見えるか？」

見えない。全く見えない。遠めに見ると同性にすら見えててしまう。そして一人とも目に霸気が全くない。ホント、似たもの同士である。色気もクソもないけどさ。

星野先輩は溜息まじりに口を開いた。つか、溜息は口を開かないと出来ない訳ですが。

「……えつとな、探し物……というか、人を探してたんだ。ここに手伝つてもらつてな。……見つからなかつたけど」

そう言つて、ちょっと残念そうに目を下に向けた。

「はあ。人探しって、誰を探してたんですか？」

「言えるかアホ。俺達星野家の天敵なんだよー。名前なんか出したら一家全員が殺されちまつ」

「マジですか？」

「……半分冗談だよ。怖い奴を探していたのは本当だけ。で、そつちこそんなところで何やつてやがる」「え？ 深い意味はないんですけど。……いや、都会のロマンを感じ

ようと」

「そりゃ」

念を押しておぐが、星野先輩は女だ。横顔とか見るとスゲーかつ
こいいから、たまに自分で思い出さないとまずい。惚れそう。とい
うかもう女でもいいから何かもう何だろ。何というか星野先輩のペ
ットになりたい。チワワになつて甘えまくりたい。ポエムの才能あ
るかもな私。

「ま、立ち止まつてんのも何だし、帰んね？」

兄貴が言う。見ると、私たちは見事に通行人の邪魔になつていた。
どうも、兄貴が一番常識的みたいだ。

街から歩いて数十分。いつもの川沿いの道。昨日のように何かが
降つてくるという訳でもなく平和だ。人とか間違つても降つてこね
ーだろうな。

「にしても何か、珍しいですよね……」Jの三人で帰るの
「ホントにな」

星野先輩が肩をすくめる。普段よりニヤつき顔だから、機嫌はい
いみたいだけね。

「……そういうユイナ、お前さ、居候を連れ込んだらしいじゃん。
話聞かせてくれよ」

「え、あ、はい。良いんですけど。……兄貴、広めた訳?」

「まさか。こいつにしか言つてねえよ。笑い話で済む話ならともか
く、色々と問題があることだし」

ホントは居候がどうだとか言つてる場合じやないんだけどね。地
球が危ないんですよ。

という事情も知らない星野先輩が、完全に面白がつて聞いてくる。

「ほり、記憶喪失とか色々聞いたからさ。どう巡り合つて、どうな
つてどうなつたのか」

「……多分、言つたら私が社会的に死を迎えますよ」
そんなことを言いいつつ、緩やかなカーブを進み……。

……さて、ここで三人同時に絶句である。

なぜかつて、その曲がり角を曲がると、田の前にホツキヨクグマがいたからだ。

ホツキヨクグマというか、白い熊。唐突にも程がある。

私は思わず言つた。

「すげー」

「……いや、確かにすげーけどな……普通、もつもつと驚くだろ。怖がる感じで」

うむ。兄貴の言つとおりである。ここ最近、自分の周りに色々な事があつた私は、未知への恐怖とかが薄れてしまつているんだろう。

……あれ、それってやばくない？ 恐怖心がなくなるつてことは危険を回避出来ないつてことですよ。つまり、どんどん巻き込まれ……。あれ、それって私の理想じゃん。

ともかく目の前にホツキヨクグマ。一人とも、どうすればいいのか迷つている。むしろ感心している私の反応が異常である。

「……おい瑞樹、どうすんだ。熊だぜ熊。死んだふりすんのかな。死んだふりだよな。死んだふり

「知るか！ と、とりあえず警察呼ぶから。落ちつけ俺ら」「保健所じゃないのか」

「ああもう良いんだよ大人に任せてさつと帰れば」

兄貴は早速携帯を手に取り、一一〇〇六電話をかけよつとして、

「 もうマセン。」

くまさんに携帯を奪い取られた。

「あー！　俺の携帯ー！」

さすがの私もこれには普通に驚いた。言葉躊躇つたよ。くまさんが。
しかもカタカナ敬語。

ホントにくまなのだろうか。

……いや、うん。何というか、もつたいぶつたけど絶対違います
よ。

「……ちよ、ちよ

田の前のくまさんの行動に呆気にとられる私、と兄貴と先輩。恐れとかは全くないんだけども、とりあえず驚愕したというか。

「ハハハハハ。オレは貴様らを待ち構えていたのダ！ お前たちは、いずれ我々の計画の障害になる存在。危険な芽はすぐにでもつまないといけません！ ははは死ねええエ！」

「ちょ、何こいつ、喋ってるよー。ど、どうじよ。どうすればいいの？」

そして敬語なのか乱暴口調なのかはつきりしてほしー。

「どうすればいいの？ ジヤねーよ。写真撮るなって。怒らすとなんかやばそだから」

兄貴が呆れたように言つ。緊張なんか、好奇心とか探究心に簡単に負けるもんじょうがよ。

そして熊さん、何の変哲もないタックルときた。さすがにちよつとインパクトに欠けるよそれ。でも団体がでかいので、それはそれで強かつたりするのであつた。

「うおつと

まあ、遅いから簡単に避けれるけどね。先輩と兄貴はいつまでも驚き顔で、どうしようか迷いながら動いている風だった。

「……おい、コイナ！ どういうことだ。俺には理解できんのだが」「え、いや、知らないよー。あ、いや、多分、アルス……じゃなくて何だけ。そう、坂本くんが関わつてることだと思つー。」「何だとおい、あいつの仕業か！」

「じゃなくて……ちよ、くまさんタンマ、くまさんやめやー。つかこれそのうち呼ばなくとも警察来そうだよね」

聞く耳持たず。くまさんは容赦なくタックルを繰り返す。

「わはははは。はははくらえええ！ はあ、はあ……」

ばてちやつた。正直、全然怖くないんですけど。可憐くさえ見え
てきた。

「つおお、じうなつたら本氣デス！ 行きマスヨ、つおおおおおつ
やあああー。タイラント北極タツクルつーー。」

どん。と音がした。重たい一撃を食らつたような、鈍い肉の音。

「ほ、星野先輩！」

ばた。

かくしてくまさん、凝つた名前の技を出さず仕舞で倒れてしまつ
た。

ちやつかり後ろに回つていた星野さんが、ヤクザキックでくまを
んを倒したのだ。

「うつわー、痛そう。ね、痛いよね。ちよ、喋るくまさんシャレに
ならない感じですけど先輩」

「きょ、キョーレツ……」

ヤクザキック一撃で倒れるくまつてどうなんだろ。まあ、ともか
く助かつたつちやあ助かつたのか。せつかくの喋るくまだったので、
ちょっともつたいたい氣もするが。

「……あー、動物愛護団体から苦情とか来たらまずこよなー。コイ
ナ、今のは無かつたことにしてくれよ。あ、瑞樹、警察呼んじやつ
た？」

「携帯奪われたのに、どうやつて連絡するんだ」

「あー、そうか。助かつた。そいらの野良犬でもまづいのに、ホツ
キヨクグマだもんな。しかも言語能力つや」

一人はそんな話をしていた。

「その時点でもまじやないような氣もしますけど」

念をおすが、星野先輩は女である。かつてなこの人。ホント。
だが、くまさんもそれでやられるほどヤワじやなかつた。

「……ははは。まさか、オレが不意を突かれるとは驚きデス。だが
しかし、甘い！ 真の姿を見せてヤル！」

「し、真の姿だとーー？」

「し、真の姿だとーー？」

「……」

「喋るくまは嘘っぽいだったのか！……！」

サンタがいないと悟った時の静かな気分を思い出す。子供にとつて、あのお爺さんは実は幻想の産物なのだと知った時のショックは意外と大したことではない。ただ、いなかつたのだと。それだけだ。確かに少し騙された気分だが、子供はそれで盛大に傷つくほどヤツではないのむ。何の話をしてんだ私は。

「真の姿？ おい瑞樹うおわ、眩し」

突然、光が世界を包む。

いやまあ、包まれていたのは世界ではなく、くまさんと私たちの視界だけですが。光が収まつたので目を開いてみると……。

おめでとう！ くまさんは にんげんに しんか した！

進化じゃなくてむしろこうしつちが本来なのだろうけどね。

「……いやいや、ちょっと待て！ 変身つてことじやん！ わよ、え、嘘、マジで……！」

なんじやこの感動は。変身といふことは、変身ヒーローだつてどこかにいるのかも。じゃあ、悪の組織も実在するのかな。ワクワク。じゃねえよ私。だめだなホント。

さてその元白クマさん、ぱつと見は、帽子で顔を隠した、トレンドコートの紳士。しかし、顔を上げると、そこには異常に鼻の長い、細い目のお兄さん……おじさんに近い……がいるのですよ。

その長鼻さんが全くホッキョクグマと全く関係のない見た目だと「……」とも驚きなんだけど、まあ、不思議な現象に慣れたとはいえ、ここまで理科の授業で学んだ内容を崩されると、そりや驚くつて。

「……何だその鼻は」

そして容赦ない兄貴の言葉攻め！

「つるサイ！ コンプレックステス！」

「兄貴、あんまり刺激しない方が……」

くません、あ、いや、長鼻はまたもタックルしてきた。身軽につたからかな、さつきよりも格段に素早くなっている。

芸がないなーとも思うなあ。普通に喧嘩した方が強そうだよなー。そして鼻のことを言つたせいか、兄貴が攻められるのであつた。

「……いい加減、読めてきたけどな」

長鼻さんのタックルを受け流しながら、兄貴は何か技らしきもので長鼻さんを倒した。

あまりに単調な攻撃。素人でも、避けて反撃くらいなら十分可能だよ。

けどまあ、これは可哀相だ。

だつて、兄貴と星野先輩のリンチだもん。いや、そんな大層なもんじやないけどさ。

見ないことにするか。

しかし、一対一とかいうフェア精神はこの人たちにはないのだろうかね。

長鼻さんはふりつきながらもどうにか立ちあがり、涙目で語り始めた。

だんだん可哀相になつてきたんだけど。

「……クク……。お前たちが普通の人間だから、こつして手加減してあげているのデスヨ? しかし……いいでショウー・サイキックを使つてあげまス!」

丁寧なんだかうつとおしいのか分からぬ長鼻が、私に向かつて手をかざす。

「……イキマス」

「……え、イキマスつて? ちょ、まずいつて、ちょ」

いくつて何があああああ!?

ふわり。捕らえていた地面の感触が急に無くなる。ぎやああ落ちるつづづづづ。

「……ややややややや、いやあああ! すげえええ!」

「すげええ! じやねーよ! もうちょい危機感持てお前!」

上空に、そう、空に向かって、落ちている。重力の向きが変わったような感じ。やばい。ジエットコースターみたいに世界がグルングルン回って……。

「わ、わ、わ、ちょ、待あああ！」

そのまま、川へ投げられたらしい。

バツシャンと飛び散る水の音。体に轟く痛み。……さすがにヘラヘラできないや。打ちどころ次第では命が危ないって。シャレじなく。……ああ、そうか。命狙われてるんだつけか。

「……これ、きっとサイコキネシスってやつだね。……すいじや」「ハハハハハ。その通りデス。スゴイのデス。着地際にわざと減速してあげたのデスヨ？ しかし、次は違いまス。行きますマ……」

さすがにダメージ。痛いわ濡れたわ何が長鼻だわ、超やばい状況ではある。

ただ、もうあと少しで死が見えるつてひとまできてるのに、私は全然怖くないんだな、これが。

……むしろ、久しく忘れていたこの緊張感……！ 高揚した私のこの胸というか心臓らへんの暴走は、

ベシ。

兄貴の不意打ちによつて、呆気なく終わってしまったのであつた。

「一応、警察にでも行つとく？」

といつこといで、交番に長鼻さんを連れて行こうと思つたんだけど、逃げられた。

トレントホールの背中部分には小さく、「サイキック団」と書か

れてあつた。

こうして、超常的な現象は、私だけでなく、私の周りの人々をも巻き込んでいくのであつた。静かに。何か、大した盛り上がりも見せず、静かにさ。

アルス

「……サイキック団ですって」
胡散臭すぎるけどさ、あの長鼻を見た後じゃあ、この一人も納得
でしょう。もつとも、私はアルスくんが現れた時から、何かを疑う
とかいう発想が無くなってしまっているのだが。
すっかり平和になつた川沿い。相変わらず人がいない。

私の言葉は時と風によつて無かつたことにされた。といつかむし
る、二人の関心は別のことに向かつていたんだ。

昨日、星野先輩に意味不明な不思議体験を語り、家に得体の知れ
ない少年を連れ帰つた私。

普通なら信じない。普通の、常識の中にいる人ならね。けど二人
とも、たつた今、普通ではない経験をしてしまつた。もう私と同類
だ。

「……ね。分かつた？ 今、世界は変わりつつある。それか、前か
らひじりだつたのかもしれないけど。……私、変なの？」

「いや。……俺も含めて、みんな似たようなもんだろうよ」

星野先輩が言つた。感情をなくしたような、低くて沈むような声
だつた。

兄貴は私に詰め寄り、言つた。

「どうということだ」

声は落ち着いているけど、怒つている。

「ユイナ、お前さつき、居候と関係があるつて言つたけど、何か危
険なことに首を突つ込んでんじやないだろうな」

「……危険じやないけど」

「だつたら今の長鼻をどう説明するんだよ。俺らがいなかつたらお
前、死んでたんだぞ」

「それは……。でも……」

「そもそも、居候の件だつてお前……」

「瑞樹、落ちつけ」

星野先輩が、私をかばうように私と兄貴の間に入ってくれた。何だか本物の姉さんみたいだな。

「お前に落ちつけとか言われたくねーっての」「うるせな。まずは話を聞かないと分かんねえだろうが。な、ユイナ。昨日の隕石の話、もう一回話してみるよ。居候のこともさ」「話すしかなさそうだ。……実際、話したくてうずうずしていた訳ですが。

「……分かりました」

私は、ここ最近あつた不思議な現象を全て話した。

パソコンが雷で止まつたこと、画面にヤシャと名乗る何者がが笑われ、ネットゲームに参加させられてしまつたこと、そのゲームで隕石の軌道を変える力が手に入る。そして、アルスくんのこと。私が、地球の運命を握つている可能性もあるということ。

二人とも真剣に聞いてくれた。そのことが、少し嬉しかつた。
「……やれやれ。俺らの知らないところで、地球ラストイヤーが始まつてたつてわけか」「……

星野先輩の感覚はよく分からん。

「まあ……ラストイヤーですね」

「……悪かったな。昨日、疑つて」

先輩は反省レベル四割程度で謝り、分かれ道で私らとは別方向へ帰つて行つた。

理論派なのに感情的な兄貴と、感覚派なのに冷静な星野先輩。似ているのか真反対なのか、よく分からない。

「……ごめんね、兄貴。受験の忙しい時に、こんなんなつちやつて「別に。……それより問題なのは……居候の方だろ」

兄貴はそれだけ呟くと、呆れたように頭を抱えて見せた。

無事に帰宅し、ほつとしたのもつかの間。兄貴は早速、アルスくんを捕まえた。

「ちょ、兄貴、いきなりかい」

「当たり前だろ」

「目が点とはこのことだろうね。困ったアルスくん。

「状況が読めないのですが」

「そりゃそうだ。」

兄貴は自分の部屋に私らを集め、ホツキヨクグマが「おひょひょひょひょ」と言いながら（実際には言ってない）長鼻になっていたいけな少女（私）を川に放り込んだあげく、倒れつつ背中のサイキック団というマークを見せてそのまま道に捨てられた（捨てたのは私である）という話をアルスくんに聞かせた。

「という訳なんだが……どういうことだ、これは

「どういうつて……超能力だと思いますが」

「それは分かつてゐる。それじゃなくて……ああ、もひつい。まず、最初から話を聞こうじゃないか」

「というので、アルスくんは超能力の概要から、私との出会い、地球の危機、ネットゲーム、異世界の存在、坂本が偽名だということまでを全て話した。

さつき私が一通り言わなかつたつけ？ まあ、私の口からだけじゃあ信じられなかつたのかもしれないけど。

全てを聞き終えた兄貴は、難しい顔をしながら、ちょっと意地悪な質問をした。

「証拠はあるのか？」

ドラマの憎たらしい弁護士を思い出して虫唾が走った。

「あ、兄貴、あんまりいじめないであげてよ……」

「お前が簡単に人を信じすぎなんだっての」

「確かに、一切疑おうなんて思わなかつたし、兄貴の言うことの方が正しいんだけどさ。」

まあ、証拠があれば解決なんだ。さあ、アルスくん！

「……証拠……ですか……」

ひるんじやつたアルスくん。無いのかな。というか、そもそも異世界から来た証拠って、あんまり思い付かないな。

もし私が三十年前にタイムスリップしたとして、三十年前の人間に今の携帯電話を見せて、自分が三十年後の人間だなんて信じてもらえるかは分からない。

「証拠が無いなら出て行けよ」

「兄貴、いい加減に……」

「分かりました」

兄妹が今にも取つ組み合ひの喧嘩を起こす前に、アルスくんは立ち上がった。

「証拠はありません。それで出ていけって言ひのなら、出でこきます」

「ちょ、地球はどうする訳！？」

「解決の糸口は見つかったんだし、後は任せせるよ。……まあ、この町には滞在するし、困つたら連絡してくれれば……」
そしてそのまま出て行つてしまつた。

「……え、ちょ、マジで！？ 兄貴、何してくれてんのよ！？」

「知らねえよ。元々胡散臭いやつだつたら？ 百歩譲つて超能力がありだとしても、異世界なんて俺は信じられない。……これで良いんだよ」

「なんで断言できるの！ 兄貴こそ、異世界が存在しない証拠とかあんのかよ！」

いてもたつてもいられず、私は部屋を飛び出した。

「おいユイナ！ どこ行く気だ！」

「アルスくん探して、連れ戻してくるだけ！」

あのヤロウ、地球を救いに来たんだろうが！ 絶対にホームレスなんかにはさせないんだから！

午後七時。外はもう暗かつた。さつき、ホツキヨクグマと戦つたいつもの川沿いに来てみた。アルスくんとの出会いの場所だつたし、ここにいるような気がしたんだけど。いない。

アルスくんどころか、人も、車もいない。たまにすれ違う車のライトが眩しい。車とすれ違つてんのかライトとすれ違つてるのか分からぬ。

そしてそんなことはどうでもいいのだ。探さないと……。そういうえば、先輩も誰かを探していただつけ。

そんなことを考えていると、急にめまいがした。え、ちょ、あ……。

「…………」

どうしたんだ私。本気で頭が痛い。道端に座り込む。意識がふわふわしている。脳の片方で、誰かと話しているような……。

誰だろう。
多分、知らない人だ。
気持ち悪い。
頭が。
体がだるい。
何だろこれ。

自分が起きているのかさえ分からなくなってしまった。

「……お前が須上結菜か」
白クマさんの繋がりだろうか。白髪の若者が見える。
手には鬼の顔をしたお面。誰なのか聞こうとしても、上手く喋ることができない。何だこれ。白クマの時とはフレッシュヤーがま

るで違う。

白クマに狙われたことが可愛い幽霊に会つた程度の危機だとしたら、これは……、

侍の生靈を前に、金縛りに遭つてゐるようなものだ。
そのうちに体が浮き始めて、頭は痺れたみたいに全然回らなくて、
ふわふわしてきて……。

何？死ぬの？死ぬのかもしれない。走馬灯は流れない。流す
ほど大した記憶を持つていないということかもしれない。

思えば本当に退屈な人生だった。

高校生で人生なんて言葉は使うべきじゃないのかもしれないけど、
それでも……それにしたつて空っぽで。本当に何もなくて、同じ年
くらいの有名人がテレビに出る度に妬んで、同じクラスの誰かが何
かの賞をとつたら羨んで、自分には何もなくて、友達もいなくて……。

星野さんと兄貴しかいない。あの二人に生かされている。あの二人
だけが私の救いで、あの二人がもしいなくなつたら……。どうな
るんだろう。

春風と一緒に暗い日々をただ過ごしていくのかな。それは嫌だ。

「……須上さん」

どこか遠いところで、誰かが言つた。さつきの白髪とはまた別の
声。

「……須上さん」

聞き覚えのある女の声。その声はだんだんと近くなつていき、

「須上さん！」

耳元で、車のクラクションみたいに響いた。

「はい！？ あ、おはよー……あれ？ 君……」

転校生の光村さんが、倒れた私を覗き込んでいた。

「酔っぱらったのか？ うなされていたが」

「……いや、あの、気分が悪くて……、って、あれ

治つっていた。気分爽快である。何だつたんだろう。今のは……。しかし、光村さんもどうしたのだろう。こんな真つ暗な時に。

「……真つ暗？ 自分の思考に慌てて待つたをかける。時計を見る
と、時刻は既に九時を回っていた。倒れる前は七時くらいだったか
ら……、

「うお！ まさか。一時間も眠っちゃつてたのか私」

「ああ。場所が場所だつたんで起こしたが。おせつかいだったか？」

「あ、いや……」

むしろありがたすぎて惚れちまうぜー。〔冗談だぜ！〕いや、感謝
はしているけどさ。

「あの、光村さんは何してんの」

「人探し」

「人探し？」

星野さんも同じこと言つてたな……。

「……心配いらない。貴女とは別件だから。サイキック団とか、そ

うこう世界とは何も関係がない」

それだけ言ひと、光村さんは去つて行つた。

「え、ちよ、待つて！ 何でそれを知つてんの？」

私の言葉は夜の静けさに飲まれた。……まるで、倒れてからの一時間、全てがキツネか何かの悪戯だつたんぢやないかつて、そんな氣さえしてきた。

「……んなことはどうでもいいんだつた」

今は、アルスくんを探さないと。

時間も時間なので、携帯に心配メールでも来てないか見ると、一通だけ届いていた。「はよ帰れ」だつて。大して心配してないなー。ちよつと残念だつたりもする。しばらく歩いていると、家の近くの公園のブランコにアルスくんがいた。

「あ……コイナ……さん」

「さん付けはしないで」

「……」めん

私は隣に座つた。何となく、カッフルみたいなことをしてみたい気分だつたんだ。

「……兄貴の言つたこと、気にしなくてもいいんだよ?」

「事実ですか？」

「それはそうだけど……」

「いいんだ。元々、こつなる予定だつたし」

ホントにそれでいいんだろうか。私は兄貴の考え方分からなかつた。彼が私を騙す理由なんて何もないじゃん。金田当てだつたらもつと金持ち狙うだろうし、エロ田当てだつたら……確かに居候はきわどいかもしれないけど、それならわざわざ私を選んだりしない

だらり……。

「ああもうバカ兄貴！」

「……あんまりお兄さんを責めないであげてくれないかな。ユイナのことが心配なんだよ、あの人は」

「まさか。固い頭で固い結論だしだけよ。そのくせ感情的なんだからわ」

「……兄って不器用なもんだよ。僕にも妹がいるから、あの人の気持ちはよく分かる。……妹の心配するのって、本当に照れくさいんだ。だから素直に言えない。それだけだよ」

だからホームレスになる、と言つて遠い目をするアルスくん。いやダメだって。主に衛生面で。

「……兄貴は私が説得する。君に万が一のことがあつたら、誰が地球を救うのよ」

「……でも」

「でもじゃない。ほら、帰るよ」

無理やりアルスくんの手をとつて家に向かつ。しぶしぶ抵抗を止めたアルスくんの顔には、戸惑いの表情が浮かんでいた。

「……ユイナ」

「ん？」

「……何というか、……ありがと」

星野さんと兄貴しかいない？

馬鹿言つなよ私。

春風もアルスくんもいるのことを、贅沢ばっかり言つなよボケが。

続・高校生の戦場

一睡もしなかった。

……睡眠時間をネトゲに費やしたからね。
寝ぼけた頭を何とか覚醒させ、リビングに辿り着く。

「……寝てないからオハヨーは言わないよ」

「馬鹿」

「どーせ兄貴には分かんない苦労だよ」

止め時がなかつたんだから仕方ないじやんか。

兄貴は何を言う訳でもなく、ただ無言で溜息をついた。

……分かつてないな、兄貴も。

そんな感じで朝っぱらから私と兄貴がメンチ切り合つていると、アルスくんが起きてきた。

「おはようございます、……」

顔が半分寝てんだけど。

「……何でこいつまでこんなに寝そつなんだよ」

あきれ顔の兄貴。

アルスくんは私のネトゲを一晩中見ていて、時々アドバイスとか貢つていたんだけども……、

兄貴に言つても仕方ないだろうなあ……。

くそ、真面目な人間はこれだから……つ。

「……そういうや、コイナ」

兄貴がどうでもよさそうな声で呼びかけてきた。

「……ん」

「お前の学年に転校生とか来た?」

「来たよ?」

「名字、光村だつたる」

「……うん」

「……これは……何かのイベントのフラグ?」

「……星野からの伝言で、『氣をつけろ』だと。意味までは聞いてない」

キタ！ 謎ワード！

一瞬ときめいてしまった。だつて『氣をつける』だつて！ かつこいいにも程がありますよ星野先輩！

興奮冷め止まぬまま学校へ走り、とりあえず教室で寝たフリしながら光村さんを待つ。

何があるんだろう。何かあるはずだ。

そういえば光村さんは昨夜、外であつたつけ。

……あの子、いや、子つていつちやあいけないな。

あの人、雰囲気も何となく星野さんに似ていたような氣もある。

何だろ。親戚とか？

……それじゃあつまらないな。宇宙人とか何かそんなん……な訳ないか。

曇りの日つて、陰気な中にも妙な暖かさといつか、ぬるさがあるよね。

ああ――――――。みたいな心境。

こういう時、何となく横に誰かがいて欲しいと思う。

何を思つていても、何をやつていても、教室に一人でいる時なんかは孤独を痛感する時だつてある。ノイズイーな教室に居て、私は一人、今日も妄想にふけつてしているのである。

……春風が来るまでは。

「よ、ユイナ」

よ、のインテネーションに芝居っぽさがにじんでいる。

そんないつもの声が後ろから聞こえた。

春風の声。

彼女は若干俯きながら鞄を机の横にかけ、ため息をつきながら席に着いた。

エセ大阪弁の少女は今日も、私と同類のオーラを出しながら文庫本を読むのだ。多分。

思えば私らは、それぞれが一人ぼっちだった。互いに人見知りだから、互いに一言も喋らずに同じ時を過ごすこともあつたつて。そして……それでも偶然が重なり、いつしかこうして友達とは言える仲になつていつた。決して深い仲ではないけど、今はそんな間柄も悪くはないと思つてゐる。

少なくとも、瀬尾さんをはじめとする「ちょっと輝いてんだけど俺達あたし達グループ」（名付け親、私）とのピリオドリした関係よりはマシだ。

弱いモノ同士でつるむような連中に共通しているのは、自信の無さだ。

そして逆に、輝いてんだけど系の連中には、優心にも近い自信がつかがえる。

いいよ、自信なんて無い方が謙虚さアピールできるし。
朝から哲学的な自分をちょっとかっこいいと思つたことに自己嫌悪。

ひつくり返すようだけど、やっぱ自信持ちたいなー。

「……そういうや、コイナ。結局隕石とかつてどうなつたんや何気なく聞こつとしたけどやっぱ演技くさくなつちやつた感じで春風が聞いてきた。

「やつぱり春風も興味深々じゃんか」

よし、聞かせてやるのではないか。昨日のホツキヨクグマ、長鼻、兄妹喧嘩に光村さんのこと……、

「あ

ふと気付いて光村さんの席を見ると、彼女は既に自分の席に着いていた。

「ああ!? しまった、忘れてた! 春香のバカ! アンタのせいで!」

「は、はあ? 何がや?」

「ひつなつたら春風にも手伝つてもひつからね!」

春風にげんこつを一発いただきました。

「……暴力女め、関西人は口は出しても手は出さないんじやなかつたのかよおおお!」

「関西人ちやうし

「ちやうんかい!」

「何でアンタまで関西弁やねん」

色々と謎だね、この女も。

と、そんなことより光村さんを眺め……待てよ、これって何かストーカーとかそんな感じに……まあいつか。

見たところ、朝の光村さんに変わった様子は見られなかつた。

「……春風。サンタがいないつていつ知つた?」

「……小学校に入った頃やつた思う」

「そうか……。私は、ひょっとしたら今なのかもしれない……」

「……つふ

鼻で笑われた。もちろんここでいうサンタは比喩だ。比喩なのだが……。

「こじつに伝わるはずもなく。

「いや、もちろんほんまにアンタがサンタを信じとつたから笑つたんやのうて……。その、アンタならありそやつたからな」失礼な。

……いや、確かにそう思われてもおかしくない言動はしますが。

私がしたかったのはサンタの話じゃなくて、期待と裏切りともいおうか、何というか……。
何だろ? うね。

昼休憩。春風と弁当を食べていると、慢心グループから瀬尾さんが歩いてきて、私に話しかけてきた。

「ちょっといい? ……須上さんって、三年の星野先輩と仲が良かつたと思うんだけど……」

「え? あ、うん。そうだけど……」

瀬尾さんが私に話しかけてくるのはよくあることだけど、モノを聞いてくるなんて珍しい。

「その星野さんって人、どんな人か教えてくれない?」

「何で?」

「何か、知り合いの知り合いがその人のファンらしくてね? ……向こうにメモあるから、来てくれない?」

「あ、ファン? ……まあ、いいけど

席を立つたその時。

春風が一人になることに気が付いた。

「……どうしたの須上さん。早く来て」

慢心グループはぶつちやけ輝いている。

私だってあの輪の中に入りたいと思ったことも少なくはない。

だけど、春風を一人には……。

一年生の時、瀬尾さんと春香の間には小さなトラブルがあつたと
聞いたことがある。

瀬尾さんは誰とでも分け隔てなく仲良くする人間にも見えるけど

いつも、春風のことを目の敵にしているんだ。

私にしかつていけない話題を切り出したのも、私を席から立たせようとしたのも、夕飯のおかずが何か一瞬気になったのもルービックキューブの面が揃わないのも隕石も、多分、全ては春風を一人にさせるため……！

（ハナからツツ「ヨミ」は求めていないし、面白いつもりもない。しかし私はこのボケによつて自分を落ち着かせ、かつ和みムードを自己の脳内に生み出そうと以下略。反省はしていない）

でも、逆らつたら私まで……って、それは今でも半分該当するからいいけどや。

でも、こう、クラスの権力者だから何と言つかあれですよね。どちらだろ。分かんねーや。

私はその場に止まつたまま、口を開いた。

「……あの、瀬尾さん？」ここで描いちやダメなの？ 実は私、朝から足の調子があれでしてね」

足の調子があれつて何？ どれなんだあああ！？ とは自分でも思ひますよ。

「……そつか。何か無理にごめんなさい。……別の人へ聞いてみるとから、バイバイ」

そのバイバイは、まるで誰かを崖から突き落とすような圧力が含まれていた。

もちろん怖くはない。ないけどや。

すつきりしない。どうにも劣等感が湧いてきて、悲しくなる。ホントはあいつらに憧れでも持つているのかも知れない。……と、いうか、持つてるんだよ、きっと。

「……なあ、まさか、ウチに構つて向こうに行かんかったんか？」

春風はひどく不安そうな声で聞いてきた。

私はちょっと悩んだけど、首を横に振ることにした。そして、

「……私、小金持ちだから。だから大金持ちが嫌いなんだよね」

意味不明な台詞を、頑張つてかつこよく言ってみた。

「…………？」

しばし沈黙。滑つたような私の発言。……反省はしていない。

多少空気が読めなくとも、私は私なりに居場所を作つて楽しめばいいんだ。ちょっと空気が凍つたり、何か收拾がつかなくなつたりしても、私なりに楽しめれば……。

いや楽しめねえよ沈黙は。

で、そんな空気を壊したのは、春風でも瀬尾さんでもなかつた。「聞いていたんだが……。須上さん。あなたは星野という人物について詳しいのか？」

忍者よりも忍者らしい動きで、後ろからひょっこりと光村さんが現れた。……つて、

「ぎやあああああ！」

声がデカ過ぎたことくらい自分でも分かりますよ、ええ。

慢心グループも含め、誰もが私と光村さんに注目し始めたのが分かる。

「み、みつ、みつ、み、みみつ」

「光村だ」

だつて、星野さんがアンタに注意しろって……！
もう遅いや。

おそらく、これが真の意味での光村さんの教室「デビュー」になるような、そんな気がした。意味は自分でもよく分からん。

星野さんについて知っていることといえば、性格とか歳とか、そんなありふれたことしか知らない。兄貴が好きだと、やたらギヤルを否定することとか平安時代が好きとかいった細かいことは説明する必要もない……はず。

「十七歳で、男みたいな女？　あなたが星野について知っていることはそれだけなのか？」

「だけってことはないけど……あの、えっと……」

だつて『気をつける』だよ？　私、アンタに気をつけなきゃなんのですよ？

特に星野さんのことについては、なるべく多くを語らない方がいい。直感がそう叫ぶ。

今まで星野さんと付き合っていた私だから分かるこの感じ。だつてあの人、本当に危険な世界にも片足突っ込んでじやつてんだもん！　まあ、そこがまた良いのだがなつ！

光村さんは私の目をじーーーーーと見つめて、私の言葉を待つていた。何か、催眠術でもかけられそうで怖かった。

「……星野剣は私を恐れている。だから詳しくは語れない。そういう解釈で問題は無いか？」

な、何でそんなん知つとんじやーいつ！

「……凶星か。まあ、そういうなとは思つていた。あなたとは、またいづれ長話をすることになるだろ？　さらば！」

そう言つて彼女は走り去つてしまつた。多分、クラスの全員が、彼女の頭を疑つたことだろ？

……星野先輩と話してみないと、何も分かりそうにないなあ。

「……え、光村さん、昼の授業は？」

「誤魔化しとしてもらえないか」

嫌じゃボケ。

夕方、三年生の教室に向かう。
教室にはほとんど誰も残っていなかつた。星野さんだけが一人、
険しい表情で外を見ている。

「あ、星野先輩……」

と言つて教室に入ろうとしたといひで、

「ちょっとアナタ、邪魔！」

「うげ」

後ろから走つてきた二年生（私の同級生）が私を突き飛ばし、星野先輩に手紙らしきものを突き出しながら頬を赤らめて俯いた。
「星野先輩！　ずっと前から憧れでました！　私のお姉さまになつて下さい！」

……うわあ。

色んな意味で言葉もない。何と言つか、実際にああいう輩がいるんだなーとか星野先輩が女にモテるつていうのは本当だつたんだなーとか色々思うことはあるけど、うん。即フられた彼女を見ると言葉もクソもない。

「あたし、諦めませんから！」

彼女は星野先輩に泣きながら言つと、そのまま走つて私をもう一度突き飛ばし、影から見守つていたらしい瀬尾さんにしがみついて泣き続けていた。

「え」

……な、何で瀬尾さんが。いや別に有り得ない話とかじゃないけど、不意に苦手な相手が見えた時とかつてドキつとするじやん。やバ。表情に出てなればいいけど……。

「…………」

「…………」

「…………」

何か睨まれた。そんなこんなで私と瀬尾さんの視線が交差する。そういえば、瀬尾さんは昼間に星野さんの情報を集めていたつ。あれはあの子、いや子って言つちやいけないや。あの人の為だつたのか。

そういう面倒見のいいところも、彼女の人望の厚さの理由の一つなのかもしれない。

……でも。

偏見かもしれないけど。それでもやっぱり「利用している」という風にしか見えないんだよね……。フラれたあの子のことも、周りの仲間達のことも。

「おーい、コイナ。俺に用があつて来たんだろ?」

乱雑な男口調が、私の意識をこの三次元へ呼び戻す。兄貴に限りなく似ているが、声は女性のもの。星野先輩だ。

「……はい」

教室の外から適当に小声で返事しつつ、最後にもう一度だけ瀬尾さんを見る。瀬尾さんは私を再びキツイ目で睨んだ後、母親のよつな表情で、泣きじやくる同級生をなだめながら去つていった。

「……で?」

星野先輩が言つた。

「いや、何が『で?』ですか。光村さんについて、もう少しちゃんと説明して欲しいんですけど」

気をつける、だけの忠告も確かにかつて。けど、そんだけの理由で転校生を奇異な目で見たり疑つたりするのは流石に後ろめたさがある。責めて、どういう風に気をつけなければならぬのかを知らないと。

犯罪者という風でも、隕石と関わりがある風でもない。確かに言動は若干変だけど、気をつけるつて……何?

「……なあ、正直に言うと」

星野さんが、やや憤り難をひき口を開いた。咄咄と近い。罪の。

「隕石とか光村とか色々関係することで、お前に見せなきゃいけないものがある」

罪と言つても、刀とか持つて腹を切りそうな感じでね。そんくら
い気迫のこもつた声だった。

「それを見せたら、お前の俺に対する考えが変わっちゃうかもし
れない。ひょっとしたらお前の中の世界がひっくり返っちゃうかもし
れない」

流石にこの真剣な空氣を壊す私ではないよ。うん。飲まれたくない
から空氣は読まないよつにしてるけど、今回ばかりは空氣は壊さ
ない。ひっくり返り上等！ 覚悟オッケーでございやすよ……あれ
？ 色々ぶち壊したな。

などと頭の中で面白くもないコントを繰り広げていないと、今、
ワクワクとドキドキとバックバクに押し潰されて死にそぐなんだ。
そんな興奮状態の私をさらにバックバクの毒氣土器にするように、
星野先輩は言つ。

「無理なことを言つようだが……何があつても、私を信じていて欲
しい。……駄目か？」

「駄目じゃないです！」

考えるより早く、口が動いた。

「……もつ何でもいいです。こんな漫画みたいな展開が続いてくれ
るんなら、私はどこまでもついて行きますから！」

ででーん。

連れて来られたのは、でっかい和風の家。

「どおおおおお！　スゲええええ！」

思わずそんな声も出る。これこそ屋敷つてやつだ。『デカイ。『デカイ』スゲー！　ヤクザの家』といつ可能性も出てきちゃいますよ、これは。……『うしょい。

「星野先輩の家……ではないですよね？」

「元実家」

元……という言葉に、当然引っ掛かる。元実家？　親の離婚とか、不幸な出来事とか、何かそんな事情でもあるのだろうか。表札に書かれていた名字は「星熊」。『うしてもあのホツキヨクグマを思い出してしまう。しかし表札も立派。我が家のかまぼこ板とは格が違う。（ウチが変なかもしれないが）

「……つーか、珍しい名前ですね……。セイコウ？」

「ホシクマだ。歴史は平安時代にまで遡るんだぜ」

勝手に門をくぐり、勝手に家中へ。

「ばーちゃん、おるー？」

「はいはい？　ありや、剣ちゃんやないの。『うしたん。友達連れて来たんか？』

「違うけ。こいつ、この前言つちよつた隕石から地球守る子や」

「ああ、こげん可愛い子やつたんか。あたしやもつと大柄な『デカイん想像しよつたけえ』

「家ん中入れてもええやろ。トオルにも会わせてみたいしな」

「あん子最近あれちよるけえ、あんま刺激すなよ」

「おう、分かつちよらあ」

「どこの方言だこれ。何か色々と混じつてないか？」

『ばーちゃん』との話が終わると、星野先輩はズカズカと家中へと進んでいった。私も慌てて追いかける。

「ちよい待ちい。話しひきたいんじやが」

ばーちゃんは和やかな声で、私を呼び止めた。

「……はい？」

怖い人ではなさそうだけど、家の雰囲気とかで『うしても』『フレッシュ

シャーがかかる。

「剣ちゃんはああ言ひきよつたけど、アンタ、あの子の友達やろ？」

「は、はあ。まあ。」、「後輩です」

「同じようなもんや。でな、アンタに言ひとせたいんやけど……」
分かつたから早く言つてくれええ。

「あの子、ちょっと凶暴なところもある思ひをやけど、見捨てんと
いてあげてな」

「……あれ、終了？」

「え、あ、はい。大丈夫ですよ」

「……そかそか。何や安心したわあ」

アニメとか映画で時々ありそなシーン。何か、いつ……、

やつには冗談に言つてあげて欲しいな。と思った。

ぱーちゃんに案内され、一家が団欒するのであらう広い場所でテ
レビ見ながらお茶を飲んでいると、星野先輩が一人の少年を連れて
戻ってきた。

「離せよ、姉さん！ オレはもう一生あの部屋で過ごすんだ！」

「うるさいな。地球はあと一年じゃ終わらねえんだから、一生あの
部屋でなんか言つんじゃねえ！」

「いーや、俺が終わらす！ でつかい隕石で……。つて、誰だそこ
のお茶飲んでる奴！」

ぶへらつ（お茶を吹き出した音）。

その少年の顔を見て、思わずお茶を吐き出してしまった。

いや、じつなるのも無理ない状況だよ。だつて、その少年つて、

「あのネットゲームの主催者……」

私が指を差して言つと、向ひつも驚いたように目を見開いて私を
見た。

星野先輩は溜息交じりに私と彼を見て、もう一度溜息をついた。
「……このいつの名前は星熊透生。ヤシヤつて自称してゐ、俺のイ
トコだ」

つてことはこの少年は、私のパソコンに映つてた人で地球に隕石
を落とそうとか考えている人で、知つてか知らずかアルスくんを呼
び寄せちゃつた人で……。

……いやいやいや。混乱する思考と感情の中で、一言言つておこ
う。

胸が熱くなりますよね（当事者的に）！

前回までのあらすじ！

ラスボスは先輩のイトロだつた！

「な、何だつてええええええええ！」

「姉さん、誰だこいつ」

イトロでラスボス……透生くんが、私に向かつて指を差す。星野先輩は何となく申し訳なさそうに頭をポリポリと搔きながら、一言で説明した。

「こいつは地球救済者。俺の味方で、お前の敵だ」

「はん！ 口だけなら何でも言えるつづーの。地球を救いたいならネットゲームをしろよ。鍵はゲームの中にあるつていうのにこんなところで油売つて、地球を救いますなんてふざけた奴」

あの私まだ何も言つてないんだけど……。

「ごめん、ごめんよ。とりあえず心中で謝つてみる。何故つて、星野さんや透生くんやアルスくんやホッキョクグマや光村さんが何か暗躍している現状で、私ときたらパツパラパーで何もしてない訳だし。……ということは、何かしていいってことなんだよね？ 地球を救うとか。

「先輩！」

とりあえず叫ぶ。星野先輩と透生くんは急に響いた私の声に驚いてひっくり返りそうになつていて。

「な、何だ、ビックリした」

「状況をちょっと整理してもらえますか！ 私は何やかんやで常識人みたいです！ 現状についていけません！」

星野先輩はソーと唸つた後、これまた急に真剣な目つきで言った。「分かつた。けど、ついでに俺や透生、そしてこの家のことを話しておぐ。今回の騒動には、俺達の一族が深く関わっている」

そうして先輩は話し始めた。嘘みたいで信じられない、でも漫画

の世界みたいで、私が憧れ続けたような話……。

時は平安。大江山には酒呑童子やら茨木童子やらいう鬼がいて退治じやーとかしちやつてウンタラカンタラ。

その後、退治された鬼達が残していた子孫は、鬼の力と科学の力、そして魔術や超能力、漢方薬など様々な力を組み合わせて改良を続け、ついには鬼の力を軽々と凌駕したすつげえ力、その名も超鬼の力を作つたのだつた。

「ネーミング、やたらシンプルですね。超ですか？」

誰も、他に思い付かなかつたんだ

現在 鬼の子孫は皆 体内は超鬼の力を含んでいる たが 力の量には個人差がある。才能と同じである。

「で、何故か超鬼の力を誰よりも使こなす透生は、このとおり引きもりライフをエンジョイ中だ」

苦勞がにじんだ目をこすり、先輩が言った。

この政界が如何ぞこの境地に至ったか理解出来るのかは！

反論する透生くん。……人によつては屁理屈だと思えるかもだけど、私は彼の感情が何となく分かつた気がした。

教室では大体一人で、もつと孤独な春風と昼飯を食つて、イケてる側の女子からは時々笑われ、何かもう何もかも嫌になつてフイクションに逃げた。……私とて、一步間違つていれば引きこもりになつているかも知れないんだ。

「透生の超鬼の力は隕石を操るほど強かつた。そしてそんな透生は世間を恨んでいる」

「地球終わりましたね」

「お前が言つなああああああー。」

あつたり言えてしまつ辺り、私も案外この星に興味が薄れている

のかも知れない。
……なんて、自分で言つてちや救いが無いんだけ
どね。

幽体離脱かと思つたけど、多分これは夢だ。

そう思つた瞬間、その夢は少しづつだけど溶け始めて、何かもう原形が無くなつて目が覚める。

でも、今回はなかなか溶けなかつた。

……多分、この夢が記憶をなぞつたものだから。この夢は過去にあつた出来事。ノンフィクションを見るのが、一番辛かつたりするんだけどね。

「ルックスは最高。実家はやや貧しいがそこがまた良い。テストはいつも平均から上位辺り。スタイルもエロい。しかし空気が読めない。……桜木春風監察日記。作、須上ユイナです」

「涼しい顔でよく言えるな」

「まあね。私は君が一人になる理由が分かる。けどさ、自分がどうして一人なのが全然分からんの。なるべく愛想は良くしてるつもりだし、それなりになじもうと努力したのに。……そりや、人見知りだけど……」

「奇遇やな。ウチはアンタが孤立する理由が分かる。せやけど自分が一人になる理由は一切分からん」

「……何やかんや言つて、今、私達は一人で話している訳だけね。だから、何と言うか……さ。あの、お昼とか一緒に食べてくれない？ 何となく瀬尾さんに嫌われるみたいでさ。入れないんだ」ほんの数か月前のことだつた。クラス替えして、友達がいなくなつて、疎外感にほほ飲まれたあの春。

桜木春風は、私の春を名前で嘲笑つていた。本人には何の意図もないはずだが、うん。何というか、桜とか春とかいう名前を持つ人が暗い顔して一人で座つてんですよ。

桜木春風は、春の変化、別れ、寂しさ……要するに負の部分を、全身で物語っているように思えた。

正直に言つと、もつと良い友達が出来たら切り捨てよ、なんて心のどこかで思つていた。けど、いつの間にか春風の良いところや面白いところも見つけちゃつて、気付いた時には相棒同士だった。一人で話して、一人で陰について、何と言つか二人なのに孤独で……そんな、傷を舐め合つような最低の関係。一人揃つて顔はスッゲー可愛いからさ、時には幻想を抱きがちな男子から告白されることもあつた。お互に全部振つた。理由は分からぬ。

「……なあ、ユイナ。もし地球が滅ぶとしたら……アンタならどうなさる?」

「……さあ、さうして笑うよ。だって、こんな世の中はつまらない。生まれ変わつたら、宇宙旅行が出来る星で暮らす。……それが、当面の夢かな」

「……」
んで、夢は覚めた。ここはリアルだと感じながらも、何とか田を開けない。名残惜しいし、現実に帰りたくないんだ。

一年後、この星は隕石で多分滅ぶ。それを食い止めるのが私の役目で……。いや、素直に言えばさ。鍵を握りつつも滅びを黙つて待つつていうのも悪くないと思つ。

アルスくんや星野先輩に流されていたんだ。救わなきゃいけないつてさ。

そういえば今何時だっけ。朝だっけ。昨夜の記憶も思い出せない。どうしたんだろ私は。というかさつきからベッドが揺れて……いや、

「これベッドじやねーな。

「つて、星野先輩？」

「……起きたか？」

私がベッドだと思っていた場所は、星野先輩の背中だった。

……星野先輩の元実家からの帰り道か、これ。

遡ること数時間前。

透生と話した後のこと。星熊家のばーちゃんは先輩が友達を連れてきたことがよほど嬉しかったのか、なんか御馳走とか作つて私と先輩をもてなしてくれた。

「透生も一緒に食わんかー？」……聞こえてないかねえ。剣ちゃん、ちょっとと呼んできて」

「はあ？ まあいいけど。透生、飯だつてよ」

「つるせえな！ 外には出ないって言つてんだろ！」

「串カツだけど、それでもいいのか？」

「つ！ ……仕方ないな、出るよ」

「出るのかよ！」

長方形のテーブルには串カツとグラタンが並べてあつて、なんかすごかつた。

座布団に座るという日本っぽいのは私にとつては新鮮で、もうなんか気分的にはパーティ直前みたいな感じだった。で、何故か透生は私の隣に座つた。

「ええええええ！」

「えええじやねーよ」

そこに箸が置いてあつたから仕方ないんだけども。

いや、でも地球を滅ぼす人と救う人が隣同士で飯を食つてどういう状況よ。

そして無言。ばーちゃんと先輩は学校の話とかしていたけど、私

と透生は何も喋らず、黙々と串カツを食べていた。

持ったコップが震えていたところから察するに、向こうにも緊張しているらしかった。なんかそのせいで急に緊張がほぐれた私であった。

「トオルくん……だつたよね」

「あん？……うん、まあ、合つてるけど。そういうお前の名前、まだ聞いてなかつたな」

「ユイナっていうんだ。結ぶに野菜の菜。結んで実れ的な感じ」

「……透明に生きろなんて虚しい名前よりはマシだな」

彼は自嘲気味に笑いながら言つた。

「引きこもるとさ、本当に自分が世間から消えちまつたみたいな感覚があつてな……。何と言つか、確かに透明人間なんだよな」

「いやいや、透き通るつてカッコイイじやん。私だってさ、小学校の頃は絞殺しの木……とか呼ばれてさ」

「あー、他の木に寄生する奴だっけか」

今考えれば不思議なあだ名だ。

私の名前は絞めるのではなく結ぶ訳だし、大体絞めるのは菜ではない。だけど、結菜が絞殺しの木っていうのは、何故だかいやなくらい納得出来る。

あの頃から、私は集団が嫌いだったのかも知れない。人間のじょうもなさにだつて、気付いていた。

その後も、透生との会話は不思議なくらい盛り上がつた。

引きこもりで、生意氣で、地球を滅ぼそうとしている透生。

……この人とは、もっと違う出会い方をしたかった。

といふことがあって、何か気が付いたら運ばれていたという稀有

な状態。

大人になつて酒とか飲み始めたら、一いつこいつとも増えてくるのかもね。

「コイナ。まず一つ言つけど、透生と仲良くなり過ぎだ」

「そりやあ仕方ないじゃないですか。何となく分かるんですよ、あいつの気持ち」

「引きこもつて勝手にキレて地球に隕石を落とそうとする奴の気持ちが？」

「いえ……気にはなつてたんです。私があいつ主催のネットゲームの説明を見た時、あいつはまるで隕石を食い止めるのは余興に過ぎないというような話をしていました。けど、今日のあいつの口調は間違いなく隕石が落下するといつよつな、余興もクソもない、これが本番みたいな感じで……」

人間としての知能、協調性……。社会の逆風や誘惑に打ち勝つ、本当の強さを持つものがいるのがどうか見せてもらいたい。

彼はそう言つていた。ゲームを盛り上げるため？

……そんな訳ないじゃんか。

「……止めて欲しいんですよ。ゲーム内の他のプレイヤーをまとめ、隕石の進路を変える方法を知性を持つとして見つけだし、恥も外聞もなくネットゲームばかりやつていられる人に。」

この世の中に、もしも本当にそんな人がいたら、自分も生きていたいと思えるかも知れないって、そんな風に思つてんじゃないかつて……。私の憶測ですけどね」

……トオルはきっと、私と同じなんだ。

学校の中で見えない殻を被るコイナと、引きこもつといつ見える殻を被るトオル。

私はビビりようもなく彼に同情していた。だから……決意した。

「……私、隕石止めますよ」

「ああ。頼むぜ。俺だってさ、イトコが魔王じみたことをするのは

見たくないんだ

私が。私が透生を止めてみせる。考えてみれば、何かを目指そうと思つたのは「これが初めてだつた。

それから五分もしないタイミングで。

ゆらり。前方で、何かが動いた。

「ん……？」

ゆらり。ゆらゆら。

火の玉だった。

「ぎやああああ！ 先輩！ あれ！」

「ゆ、ユイナ、落ち着け！」

「はつきり見えないから近寄らないと！」

「馬鹿かああ！ お前は馬鹿かああ！」

空から人が振つてきたり超能力で浮かされたりしたとはいえ、私はあまりにも超常現象に慣れ過ぎてしまつた気がする。

けど、そこに人がいたのを見たら流石に驚いた。

少女だ。不機嫌そうな目つきに、ショートカットに和服。暗くて色は見えないけど、どちらかといふと黒に近い色。

その姿は、西洋風の人形と日本のコケシを足して究極に可愛くしてみたに見えた。

「……光村さん？」

「あなたに興味はない。……私は鬼を狩る者だから」

……鬼を……狩る？

それって、星野先輩が狩られちゃうつてこと？

瞬間、光村さんの体が弾丸のよつこぼじき飛ぶ。

「せ、先輩！ 避けて！」

「ユイナ、先に帰つてろ。……大丈夫だからさ」「先輩は飛びかかってくる光村さんを流れるように避けると、手だけをこちらに向けて軽く振つた。

……帰る訳がない。こんな展開、見逃せる訳がないじゃないか。

「……星野剣さんですね」

「そうだけど」

「……噂どおりの美人さんですね。ちょっと見惚れちゃいました」
無表情のまま、光村さんが言つ。本人は隙だらけなのに周囲に火の玉が飛んでいるから安全っぽい。

星野先輩はだるそうに火の玉を田で追つていたけどすぐ止めた。
普段は無意味な行動が多いくせに、こいつには最善の行動だけを瞬時に選ぶことが出来る。それが星野剣です。一家に一台、星野剣。

緊張感とか照れくさくて持てないんだよ。まともに見ると怖いし、斜に構えることくらい許してもらおう。誰にだる。ウダウダ頭の中で考え込むのは私の悪いくせだな。

「出来れば見逃して欲しいんだけどなあ。俺さ、九時には帰つて寝てみたいタイプなんだよね」

「……零時まで遊んでおいて、」

光村さんが飛び上がる。もはや人間ではないジャンプ力で宙に舞うと、

「どの口が言つているんですか！」

そのまま星野先輩に急降下。だが先輩もやわじやない。光村さんの蹴りを頬で受け、そのまま足を掴んで空中へと投げ飛ばした。
結果、お互いに無傷っぽい。宙に投げられた光村さんはともかく、勢いよく頬を蹴られた星野先輩が無傷つてどうということじやい。

光村さんは不満げに溜息をつくと、あくまで冷静に言葉を紡いだ。

「……避けられたはずですけど。何故受けたんですか？」

「格の違いを見せるため……とか言つたら逃げてくれない？」

「御冗談を。私は貴方を殺しに来たつもりなんですけどね」

ただの喧嘩じゃないとは思つていたけど、本気で殺す気とは。

そりや そうだーと言われたら何とも言えないんだけどさ、流石に健全な高校生である私は知人に死なれるなんてそんなこと想像もしちゃないし何と言うかあれですよ。

「…………あへへも、まづ」

止めなきや。自分を自分で誤魔化している場合じゃないつーの馬鹿か私は。

いつだって独りよがりな思考に逃げて、自分の不幸とか都合の悪いことを全部周囲のせいにした。私は高度なことを考へているけど、春風も瀬尾さんも誰も私の崇高な思考についてこれない。私は悪くない。私は……。

おそらくあなたは地球の運命を担っています。

アルスくんから言われた時、飛び上がるほど嬉しかった。だってさ、私が特別だつてことが、ようやく照明出来たから。やっぱり私は周りとは違うんだつてことが、ようやく……。

でも特別でいるにしては、私は無力過ぎる。

結局私は凡人の一人なのかも知れない。目の前で繰り広げられる戦いは確かに私がずっと探し求めていた「特別な」ものだつたけど、だけどそれを目の当たりにした私は、あまり喜びを感じることが出来なかつた。

私は弱い。この一人に敵う自信が無い……。

悔しい。この戦いのレベルの高さが、私の存在そのものを全否定しているようだ。

前二十九曲

なんて言つてゐる間に戦いは激化してゐた。火の玉を指先から放

つ光村さんと、その火の玉を掌で受け止めて無傷な星野先輩。

先輩は防ぐばかりのようだつたが、苦戦しているのはむしろ光村さんの方だつた。

「……眞面目に戦う気はないんですか、鬼のくせに」

「正確には鬼じゃなくて人間なんだけどな……。それでもダメ?」

「ダメです。死にたくないなら私を殺して下さい」

哀願するような声だった。でも、相変わらず光村さんは表情を変えない。……それが不気味だった。

何が彼女をここまで必死にさせるのか、私には分からなかつた。教育? 宿命? こだわり? ……全部有りそうだし、全く共感出来ない訳でもないんだけどさ。でも……躊躇なく殺しつて、ねえ。

五分後。私はこの状況を開ける術をほどほどに必死で考えつつ、この一人の漫画みたいな戦いをちょっと楽しみながら見ていた。実際に見ていると、超鬼の力というものがどういつものがよく分かる。

星野先輩は光村さんの攻撃が当たる瞬間、当たりそうな部位に力を集中させ、見えない壁を作っているのだ。基本的には掌で受け止め、その先に壁を作つて相手の攻撃を防ぐ。先に作った壁を攻撃に合わせて動かすことも出来るから、合理的だ。

けど、その防御は一部への集中的な攻撃にしか通用しないんじやないかな……と私は思う。

だつてさ、広範囲に広がる爆風なんかは体全体を守らないと防げない。けど、そんなことが出来るのなら、先輩はこんな戦い方をせずに最初から体全体を防御しているはずだ。

力の温存? ……それならもつとまづい。疲労した時にたたみかけられたらオシマイじゃんか。

「くつそ……しつこいなお前。ちょっと疲れた」

オシマイだああああああああああ!

「待つた待つた待つた!」

私は反射的に飛び出し、続けざまに攻撃を仕掛けようとする光村さんの前に立ち塞がつた。

「ちょ、ユイナ! 帰つたんじゃなかつたのかよ!」

「いや気付くでしょ！ 結構どうぞ見てましたよ私！ それより大丈夫なんですか！？」

「当たり前だろうが……」

そう言つと、先輩は私をひょいと抱えて急に走り始めた。

「な、何ですか！」

「いや、考えてみれば逃げる」とを忘れていた

「馬鹿ですか！」

「ある程度自分が強くなると、あんまり逃げようなんて思わないもんだ」

自分が強いつて言い切つたよこの人。嫌味に聞こえないのはすこいかもだけどさ。

「……じゃあ、逃げたがる私はまだまだ弱いつてことですか」

「弱いまままでいられるのだつて、ある意味幸せなんだぜ？」

その言葉は、私には強者の勝手な言い分にしか聞こえなかつた。

「つか、逃げなかつただろ。熊の時も今回も」

「好奇心に負けました」

「バカタレ」

ふと、後ろを向いてみる。光村さんが追いかけてくるような、そんな気がしたから。けど、何も無かつた。

「……今日はこれで終わりなのかな……」

こんなことがあつて、私の世界が大きく動きを見せた夜でさえ、町の姿はいつもどおりの平和を語るだけだつた。

瀬尾夏鈴さんの遺憾千万（前書き）

あまりにもあれなので書き直してたらページ数余ったんで瀬尾さんに書こうとしたら結局コイナのターンだった。重要な話ではないので読み飛ばし可です。）。

瀬尾かりんは人間である。あだ名はまだない。

金持ちで才能もあり、その上面倒見の良い完璧な彼女を相手に、あだ名呼びをするような恐れ多いことは誰も出来なかつたのである。

恐らく。クラスの中であだ名が全く無いのは、クラスでも立場的弱者である須上ユイナと桜木春風、転校生の光村と自分くらいなものである。

あだ名なんか必要無い、と思いつつ、その事実は完璧故の孤独の現れであるような気がしてならない。

それに、明らかに立場の弱い三人と自分が並ぶことは、プライドの高い瀬尾にとっては耐えがたい屈辱であった。

……もう、昔とは違う。

全部、手に入つた。なのに。

美貌も強さも手に入れたのに。なのにびびりして……。

親友が出来ない。

須上ユイナと桜木春風は、互いに親友と呼び合つ仲だ。

他の誰かなら構わないのに、よりによつてその一人。……瀬尾かりんの心は、激しい嫉妬に満ちていた。

醜いと、自覚しながら。

「……何か、隕石の動き不自然だよね」

新聞を見ながら、アルスくんが言つ。

「それは、まあ。地球にぶつからないといけない訳だからねえ。……

やれやれ。高校の人間関係もピリピリしてゐるし、地球救う自信も無くなつてきたなあ……」

「ええええ！ 僕がこの星に来た理由が無くなる！」

こんな日々がずっと続くような、そんな気がしてゐた。

学校では光村さんや瀬尾さんとの関係に悩み、家では隕石とネットゲームに悩まされて。

クソみたに辛くて、希望なんてどこにもない。……そんな道が、永遠に続くような感じ。

「……結菜。あのさ」

アルスくんは、急に真面目な声になつて言つた。

「人の生活はさ、全てのことが相互に関係し合つてゐる。だから、学校での人間関係やそれ以外のことも……」

「分かつてゐるよ。……出来るだけ安定させるからさ」

嘘だ。絶対安定しない。学校での平穏なんて、瀬尾さんみたいに位の高い人間でないと作れないんだ。

地球の運命が私にかかつてゐるなら、私に関わる全ての人にも、多少は地球の運命が背負わされているということになる。……それなら、他の誰か……例えば瀬尾さんとか、の責任にして、逃げてしまふのも悪くない。

眠くてはつきりしない頭で、そんなことを思つた。

……本当に私は、世界を救うのかな。

学校に行きたくありません。

瀬尾さんが怖くて……。ではない。

ついでにこれは別に不登校宣言ではありますよ。けやんと行きますよ学校。

……光村さんと顔を合わせたくないんですよ。
何せ隣ですからね。

先輩を殺そうとしたあの光村さんが、隣で授業を受けたり弁当食べたり何か色々するんですよ。もう、何か考えただけで……。

「あー」

「……だ、大丈夫？」

アルスくんが私を気遣う。といつか、一時間ずっと溜息つかれた
ら、気遣わざるをえないよね。

昨日はネットゲームをする気力もなくやつと寝た。で、起きて
昨夜の星野先輩と光村さんの戦いを思い出しても溜息連発。
憂鬱だけどねえ。行かないと駄目なんですよ。着きました。
着きました。何となく繰り返す。繰り返してもやる気になれ
なかつた。

しかも既にいますよ隣にいっ。

「お、おはよう、光村さん」

「……昨夜、何か見たか？」

「うん」

普通は慌てて「見てない」って言つといひだよね。答えてやつと
気が付いた。やべえ。緊張感のあまり喧嘩売つつけた。

「……もう一度聞く。昨日、何か見たか？」

けど。けじで嘘をつこうじうなる。……多分、もう一度先輩が狙

われる。また逃げ切れる保障も無いし、そもそも光村さんの意図が不明過ぎる。

「ここで何か聞かないと、何も変わらないままじゃんか。」

「見たよ。最初から最後まで全部見た。アンタが先輩のほっぺを蹴り飛ばしたところも、それで先輩が無事だったことも見た。ついでに鬼のことじだつて知ってる。……文句があるなら言ってよ」

「……そう言つのなら、貴女も鬼と同じだ。訂正するなら今のうちだぞ」

「マジでか」

「ターゲットにする、といひとか。やべえ。私なんか瞬殺されちゃう。」

「……見ていないことにじて、一度星野先輩に任せるべきなのかな……。とにかくそうしよう。うん。ここで死んだら地球が絶望的だし。うん。」

「見でません！」

「よし」

「いいよ。」それで光村さんを怖がらず「学校来れるし、私も地球も安全だし。

で、何でちよつと涙が出てくるんだよおおおお！

「情けない。私、全ての負担を星野先輩に投げちやつたよ！ 確かにあの人は強いけど、いくらなんでも役立たず過ぎるじゃんか私！ 腐つても地球を救うんだろうが私！ 地球を肩に背負う者が、こんなところであつさり曲げるなんてことが、」

「許される訳ないじやんかああ！」

勢いよく突きだした拳は光村さんの頬をかすめ、そのまま光村さんによつて体ごと投げ飛ばされる。私の勢いを利用した華麗な反撃だけどちよつとこれ危ないよおおおおおお！

スローモーションに見えるつていうのは本当だつたんだ。投げられた方向は教室の出入り口で、ちょうどそこから瀬尾さんが入つてくるのが見えた。

「避けてええええええええええ！」

「は?
え、ちよ
」

平和な学校にあるまじき光景ですよ。ガッシュヤンデジタンうるや
えの何のって。

嫌いな相手同士で不本意ながら抱き合つ形になつていたのはもう泣くしかないですね。お互い悲鳴上げて退いて、ガラスの破片が散らばつていることによつやく気付いた。

トアを壊したとして、利とナガさんと瀬尾さんは職員室に呼び出される羽目になつた。

「……あの。私が呼び出しが餘りないところがおかしいと思ったんだ
ナビ~」

「いや、うるさいのは瀬尾さんである。私と光村さんのプロレスっこに瀬尾さんが巻き込まれた、というのがクラス内での一番有力な解釈であった。

制服でプロレスごっこする女子ってなかなかないと思う。特に

「私も須上さんのパンチを避けただけだ。私が呼び出しを喰らうのもおかしいだろう」「いや、多分女子高生じゃないと思ふ」と

自分で言うのも何だけど、今日の私は元気だな。

とりあえず誰が何を言おうと三人で説教を受けるのは決定事項。

昼休みに入つたところで私達は職員室に向かつた。

星野先輩がいた。

「せ、先輩！ 逃げないと！」

「星野剣、覚悟！」

いきなり飛びかかるとする光村さんを、私は何とか後ろから止める。

瀬尾さんはとりあえず状況を読んで、私と一緒に光村さんに絡みついた。……いや、止めたつてことです。

「……やれやれ。元気だなお前ら」

「複数形ですか先輩！」

「事実だろ」

「……そうですね」

元気、ねえ。今の私達の異常行動の原因は星野先輩にあるのだが。へらへら笑つている星野先輩に毒氣を抜かれたのか、光村さんも大人しくなった。

「で、何やつてんだよ。こんなところで」

「……噂になつてませんでしたか？ ドア壊した二年生の話」

「聞いたけど」

「あれ私らです」

「馬鹿やつてんな」

「ですね。……でも、楽しいですよ」

私の楽しい発言に先輩は笑い、瀬尾さんは唖然とし、光村さんはノーロメントだった。

こういう生き方をし続ければ、意外と退屈なんて味わわずに済んだのかも知れない。

はしゃいでドアを壊して、積極的に何でもやつて。それで失敗したとしても、笑つて何とかしちゃてさ。そんで次のチャレンジを探して……。そんな生き方。

それでも良いと思えた。今までの私には決して届かない、暖かい生き方。

……けど違う。そんな生き方は妥協に過ぎない。

生きている間のことしか考えないなんておかしい。幸せなんて幻で、所詮はその場しのぎの慰めなこと。みんなそれを追いかけてる。

違うんだよ私が求めてるのは。

異世界があると分かつて、鬼の力があると分かつて……。
それでも人並みの幸せしか追いかけられないなんて不幸だ。

私は地球の救済者になるんだ。孤独でも良い。それが私にしか出来ないことなら。

……それが、私の価値になるなり。

weak student (後書き)

相変わらず何かこんななんですが感想くれたらクソ喜びます。
悪い点でも参考になるんで……。

異常者と異世界人・参（前書き）

説明つて難しいですねえ。どうしても「いやいや」とちやしてしまいます。ということでお書き直しておりますが、説明の内容に大きな違いはありません。

「ドア壊したバカが三人いる、と言つ話を聞いて、どうせ男子か星野のどちらかだと思っていたんだが」

風紀担当の男性教師は、何とも不思議そうな顔で私達を見る。

「……どうやつたらお前らがドア壊すんだ」

私と瀬尾さんと光村さん。

教師から見れば、大人しい優等生とカリスマ的優等生と転校生である。

「ひつひどく叱られるものだと覚悟していたけど、教師の方も一度目は無いと判断したんだろうね。三十秒程度の小言の後、

「次からは気を付けるように」

とやんわり釘を打つだけで、さっさと私達を解放してくれた。

「……まあ、不細工いなかつたしね

「女の先生じゃなくて良かつたわね」

光村さんは既にこの場にはいなかつた。行動が早いのも、鬼を狩る者としての心得なのかも知れない。

「んじや、教室に戻ろうか

「そうね」

私が職員室から東へ進むと、瀬尾さんは西の方へ進み出した。確かに階段さえ上れば良い訳だから、どっちからでも帰れるんだけどさ。

……何だこれ。この流れで、一人バラバラに帰ることになると思わなかつたよ。

そのまま、授業は何事もなく進んで、ドア破壊も単なる笑い話に変わつていつてさ。

「それじゃあ、今日はこれで解散。帰りにドアを壊したりするなよ」

「 担任が言つ。別に、私達に対する嫌味という感じではなく、おちやらけた冗談っぽい方だった。」

学校、終了。

瀬尾さんは皆に、登校したら須上さんが飛んできたという話を笑い話のよう語っていた。ネタがある時、ああいう集団は盛り上がって、特有の輝きを見せる。

皆、笑っている。

「そもそも何で飛んできたのかつていうと、光村さんが投げたみたいで」

「えー、何それスゲー。スゲーつていうかスゲー馬鹿」

「ぶつかる瀬尾さんも笑いの神様に見守られているというか、笑いの呪いにかかるといつか」

まあ、自虐も多少は入っているみたいだけじゃ。

……私は須上さんにぶつかられただけで、被害者だ。悪いのは全部、ぶつかってきた須上さんの方だから誤解しないでね。

という解釈も出来るような内容にも聞こえなくもない。……被害妄想するのも情けないけどさ。何というか、案外私はネガティブなのかもね。

とりあえず良くも悪くもネタの中心人物である私は、集団からの視線をそれなりに集めている……らしかった。そつちに目を向けるとちょくちょく誰かと目線が合つ。

……ここで、苦笑いでもしながら近付けばね。案外あのメンバーの一人になるかもですよ。

そしたら瀬尾さんとも今までよりはマシな仲になつて、少なくと

もこれまでより明るい日々が始まる。

あんまり話したことなかつたけど須上をんつて面白いよねー、といつ流れだつて無きにしも非ず。いつの間にやら人気者。ゲハハ。……なんだけどさ。

万が一にもここで馴染めたとして、

満足して、

変わつたとして、

悩み続けたことを過去の出来事にする……なんていつのはな。今までの私が無駄だつたって否定するみたいで、怖い。

それにさ、イケてる集団の中に入るつて、結局は何も考へない馬鹿になるみたいで悔しいんだよね。

悔しいし、春風を裏切るみたいで……。

だから、行かなかつた。

……行けなかつた。

帰宅。すっかり夕方。なんか溜息。

私の部屋では、働きもせず学校にも通つていのい居候が、ネットゲームでレベル上げに必死になつていた。

彼は自らをアルス、または坂本竜馬と名乗り、地球が危機だとか怪しいことを……。

と冷静に文書にすると、とんでもなく駄目な人間の話としか思えないよね。

少なくとも、実際に彼がここに来た様子を見た私や、私と共に異

常な現象を目の当たりにした兄貴や先輩以外には、彼のことは信じられないと思う。

「記憶喪失のホームレス高校生っていうか、ただのプレー太郎だよね、君」

「自分でそう思うよ。第一、通う高校が無いのに高校生を名乗ることに無理があつたんじゃ……」

アルスくんは自嘲気味に笑いながら、軽く溜息をついた。

記憶喪失高校生、坂本竜馬。

あの設定は流石に即興過ぎたか。母さん達に嘘がばれるのも時間の問題かも。けど、だからって本当のことと言つても信じないだろうしな……。

いや、母さんの場合はすんなり受け入れてしまうかも。それはそれで怖いや。

「むしろ、ばらしちゃ おつか」

「いや、ちょっと無謀なんじゃないかな……」

まあ、ほつたらかしでも問題は無いでしょ。緩い一家だしね。

それよりも、問題はゲームの進行具合。

「そんなことよりも、問題は僕がここにいる理由だ」

「……は？ ここにいる理由？」

「うん」

今更何を言つてんだこの異世界人は。

「そりゃあ、隕石から地球を守る為じゃないんかい」

「ちやうんかいコラアワレエ。何人だ私。

しかし、アルスくんはやんわりと首を横に振つた。

「君から得た最近の情報を元に、色々考えたんだ。ゲーム主催者の正体や、超鬼の力と呼ばれる一種の超能力の存在のことを踏まえて、普通に考えればこうだ。

超鬼の力を使いこなした星熊透生は、何故か人間を嫌つていて、自身の力で隕石を操り、地球を滅ぼそうと思った。ただ、ひょっとしたら自分を理解してくれる者がいるかも知れない。だから自作のネットゲームに賭けたことにした……と

「……普通に考えればつてことは、普通じゃない考え方もあるつてこと?」

「ああ。だつて、この考えが正しければ、地球は自壊することになつてしまつ。星熊透生がこの星で生まれ、暮らしてきた人間ならね。……それじゃあ異世界から僕がここに来る条件に当てはまつていないんだよ。異世界が一切関わつていないから」

「確かに、そりやそつ……か」

「宇宙といえど同じ世界。だつたら隕石だつてこの世界産。アルスくんが地球を救おうとしているのは、地球の危機に、異世界が絡んでいるからだ。」

隕石や普通に地上で暮らしてきた透生は、もちろん条件に入らなり。

「ということは、

「透生以外の黒幕がいるとか、当初言つていたみたいに、透生が超鬼の力ではなく異世界に関係する力を使つていてるとか、やつぱり隕石は別件でしたー、とか?」

「主催の透生本人がどこかで異世界人と入れ替わったとか、隕石に異世界人が乗り込んでいるとか……。考えたらキリがない。あと、主催者の超鬼の力があまりにも強過ぎるのも疑問点だ。主催者がネットゲームをどうやって作つたか。」

それからどうしてこのタイミングでゲームを始めたのか。そもそも超鬼の力とは具体的にはどのような力なのか。情報が足りないんだ。ネットゲームや主催者、それから異世界と

この世界、君と地球に訪れる危機との関連性……とにかく今は、情報が欲しい」

そういうと、アルスくんはじつと私を見た。

……いや、見られても。

「あの、私に情報収集しろとか言われても無理だよ?」

人脈も狭いし、大体質問の内容が一般の方々には受け入れられない訳でして。

「言う前に断られたか……。けどユイナ。君は地球の運命を担っているんだ。君の周囲にヒントが転がっている可能性は極めて高い。だから」

アルスくんは一瞬だけ目を逸らすと、煮え切らない告白のようこ、躊躇いつつ言った。

「明日から、いや、何なら明日だけでもいい。その、何だ。……君を尾行してもいいかな」

前回のあらすじー。尾行されることになりました。

「どうやって？」

だつて登下校時以外は高校にいるんだよ、私。尾行といつても、学校の外だけじゃあ意味無いと思うし……。

で、だからといって、生徒じやないアルスくんが学校の中に入るの、色々と問題もある訳で。

「そもそも君つて学校のこと分かるの？」

「もちろん。部外者が侵入し難いのもちろんと知つてている。大丈夫。尾行するのは僕じやなくて、こいつだ」

アルスくんがポケットの中から取り出したのは、なんと、ゴキブリだつた。

「ひょ」

びつくりして勢いよく退いて壁に頭を打つた。変な声は漏れただけ、大袈裟な悲鳴とか出さないよ。むしろ絶句だよ。

「あれ、ごめん、苦手だつた？」

「苦手じやなくてもビックリするでしょうが普通……。いや苦手だけども」

それとも、異世界では突然ゴキブリを差し出すのも普通なのかな。これが私を尾行する……つて。確かに虫なら人よりは学校に侵入し易いけど。

「一応言つておくけど、これは虫をモチーフにした機械であつて、本物ではないからね。平たく言えば尾行マシンかな。

この虫には隠しカメラとマイクが付いていて、人工知能も内蔵されている。で、こいつが得た動画や音声は、こっちの受信装置に送られるんだ」

アルスくんが十年くらい前の携帯ゲーム機……のよつたものをポ

ケットから取り出す。何つーか、ポケットに何でも入るんだなーと感心する。

「短所は通信距離かな。この一つが通信出来る距離は一百メートル程度。そして、この機械には録画機能が付いていない」
ちなみにここから学校までの距離は……まあ、少なくとも一キロはあるかな。

「だから、結局僕がこの受信側を持つて尾行しないといけないんだよね」

「ショボ！」

仮にも異世界間を移動する技術を持つ世界の産物……にしては随分不便だよね。

「この世界にあまりにもそぐわないモノをしてしまうと、文化や常識を壊しかねないから……」

言い訳なのか事実なのか知らんけど、アルスくんは苦笑いしながら言つた。

「君の存在自体が、文化や常識を壊している気もするんだけど……」「それはまあ……優先順位の問題もあるよ。尾行することによるメリットと常識を壊してしまうリスク、どちらが大きいかといえばリスクの方だからさ」

常識を壊すことのメリットは無いのかな、とひょっとと思つ。

壊れた世界の方が、何か面白そうじゃんか。

冷たい雨が降り続く朝。家を出て通学路を歩く。

不便。ショボい。駄目駄目。と思われた「キブリ型のソレだけど、意外にも実用性は高いみたい。

飛んでも羽音はないし、踏まれても轢かれても大袈裟なダメージは無く、雨に濡れても平気らしい。ついでによく見たら自爆装置

が付いているところオマケ付き。

田立つた弱点は、この虫が地上を進む時、カメラがどうしても下から上を見下ろす形になることくらいかな。

…… 制作者がスケベだったとか…… かもね。

教室では、ソレは私の鞄の中に隠しておいた。カサカサ走り回られたら気付かれるつていうのもあるけど、女子高生がいつぱいいるからね。うん。余計な心配かな。どうなんだろ。

教室は当然だけど、いつもと同じだった。瀬尾さん達が楽しそうに話していて、春風はまだ来てなくて、光村さんは静かに文庫本を読んでいる。

…… こんな平凡な場所で、私だけが重大な秘密を持ち込んでいる。地球を救う為にゴキブリ大作戦ですよ。

私から一百メートル以内のどこかでは、鞄からの教室の風景をアルスくんが見ててさ。私はこの「ゴキブリが他の人に見つからないよう頑張つてや。

いや、むしろ見つけられて「だめ、これは秘密なの！ 私が地球の運命を担つているなんて言えない！」なんて展開もアリかもね。妄想は止まりませんよ。

でもそんな都合の良い妄想はどうせ現実にはならず、ちょっと期待外れで一日が終わるつていうのも、私はちゃんと理解している。

…… つもりだつたんだけどなあ。

ハプニングも一切無く、簡単に一日終了。問題は動画や音声がちゃんとアルスくんに届いたかどうかなんだけどね。そんな味気ない心配しか残つてないのかよおお。

「あー……。いけんわ。何がいけんつて…… いけんわ」
独り言も出ますよそりや。

サンタさんは幻なんだよ。でもちよつとは期待しちゃうじゃないですか。期待してちよつとソワソワして、あとで自棄に落ちこんじやうんです。

そんな心境。せつにえれば今日は金曜。普段ならまじやいでの田なんだけじね。

土日は透生主催のネットゲームをやるチャンスですよ。地球救済に一步前進じやん。でもなんか、それも悲しいんだよねえ。ゲームの為に生きているみたいで。

「……退屈」

多分、今最も的確に私を表す一字熟語。平凡とか一般とか、他にも色々あるけどね。

すっかり雨も止んで、結局今日も平和な一日。いつもの川沿いの道で、溜息つきながら歩いてる。

川のせせせらぎ、名前も知らない虫の声。緩やかなカーブを進み…。

…。

さて、ここで絶句である。

なぜかって、角を曲がると田の前にホツキヨクグマがいたからだ。

「……またかよ」

一度目にもなると、流石に大きな驚きはなかった。

「仮にも命を狙われている分際で、何とも失礼な反応デスネえ」

不敵な笑みを浮かべる白クマさん。

「どうか、何で白クマなの?」

「人型よりも身体能力が優れているのデスヨ。テクニックの人型とパワーの獣型。使い分けテいるトイフズ、トイフス」

「へえ。で、何で私の命を狙うの? 計画つて言つてたけど、何か企んでたり?」

「質問攻めでカマをかけようとしても無駄でスヨー。」

そんな風に聞こえたんだ。

「…………ごめん、なんかもつ、色々と若さ故の悩みみたいなのが頭ん中ぐるぐる回っててさ。白クマが出たくらいでビックリしないんだよね……」

「いいでシヨウ。その挑発、ノリマスヨー。」

「…………え。挑発になっちゃった？」

「本気ヲ出しまス！ 勝てるもののナラ勝つて御覧ナサイ！」

「ちよ、ちよっと、本気つてすごいの？ ……すごいか」

「…………いやいやいや。」

よくよく考えたらすんじにピンチな訳で。超能力とか変身とか野生のパワーとか色んなものを駆使して戦う変人に命を狙われているのですよ私。

喧嘩して勝てる相手じゃないし、逃げ切る自信もない。

「これはあれだ。…………ピンチだ。」

「タイラント北極タックルううううう！」

「ぎやああ！ こつち来んなああああ！」

くまさんはまるで車のよう、勢いよく私に向かってくる。もはやクマじゃない。超人的アメフト選手の動きだよ多分。スピードも勢いも凄まじい。

ただ細かい動きは苦手なのか、ひょこと横に移動すると、そのまま、白クマさんは勢いよく私を通り過ぎていった。

案外楽勝？ いや…………どうだろ。あまりの拍子抜けに、ポカンとしていると……。

白クマさんがタックルしながら戻ってきた。

「ぎやああああ！」

絶叫しつつ避ける。近所の人が警察を呼ぶか、……それが、アルスくんに期待するか。策はそれくらいしか思いつかない。

「ハツハツハ、所詮は小娘、一人デハ何モデキナイようだナ！」

戻つてくるのをまた避ける。白クマさんはもう一度、ダッシュで私を抜いていく。

そこで悟つた。……あれだわ。これ、往復しながらずつと続くやつだ。

タイラント北極タックル。……。名前は間抜けだけど、走つてくる熊さんは、もはや車か、それ以上のスピードです。

だつたらあれを喰らうのつて、車に轢かれるようなもんじやんか。

三回目。

まだいける。余裕を持つて受け流す。

四回目。

運動量は少ない訳だし、集中していれば何とかなるけど、

五回目。

結構さ、終わりが見えないのつて嫌なんだよね。

六回目。

それで……反撃さえ出来ないんだ。

川があつて、反対側には塀があつて民家があつてそのずっと先には山があつて。

そんな、人の気のない小さな一本道。横には進路がない訳だから、熊の射程範囲外に逃げることも敵わず。

避けて、走つてきて、避けて、走つてきて、避けて……。攻撃は終わらない。

だんだん一発ごとの時間の感覚が狭まつてきて、小回りも利くようになつてきている。速度もちょっとずつ上がつてきて、さながらトラックの如しですよ、ええ。

一方、私は逆に、余裕が徐々に無くなっている。疲労もだけど、この状況を打破することが出来ない事実が精神的に重たい。

「ねえ、ちょっと……。もう許してくれない……？」

基本的には斜に構えてないとやってられないスタンスな私だけど、流石にふざけてられない。

これは、本当にヤバい。

状況を変える方法。受け止める？ 打ち返す？ モノで防ぐ？ 説得？ 全部駄目だ。

こんな時、浮かんでくるのはネガティブなことばかりでさ。

……私が力尽きて、あのタックルをモロに食らったとしたりビッグなるんだろう。

大怪我……それとも、一発で死ぬのかな。

死んだら私は……どうなるんだろ。

そんなことを思った瞬間、集中が切れたことが自分でも分かる。死んだその先なんて知らないけどさ、

それを知る術は、目の前にあった。

最初とは比べ物にならない程のスピードださ。熊の顔した絶望が向かってくるんだよ。

その一瞬、私の見ている全てがスローモーションになつて、直後。

諦め、絶望、悔恨、悲哀。

激痛。全身を駆け巡つた。

「……っ

吹き飛んで、川に落ちて。

死んではないけど、死ぬほど痛かった。致命傷、かも、知れない。
「サア、そろそろトドメデス！」

勝利を確信して、白クマが川に飛び込んで来る。

情けないけど声が出ない。恐怖と痛みが激しくて、もう諦めようかと思った。

無理。

もう……ね。アルスくんと出会う前は、人生リタイアする気満々
だった訳だし。
もしかしたら全部が夢なんじゃないかって希望もちょっと持ちな
がら。

……私は、目を閉じた。

アルスくん、来てくれなかつたなあ……。

続く……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8909m/>

須上ユイナの地球救済

2011年10月10日03時24分発行